

採
蓮

Siren

第十八号

No.18

目次
Contents

採蓮のいわれ 4
The Implication of "Siren" 5

開館二〇周年記念
歴代館長たちのシンポジウム 歴代館長よもやま話 7
Tales from the Museum of Art Directors, Past and Present 25

『桃源詩画』について―画僧・月儼の桃源郷 松岡まり江 26
"Togen Shiga" by Gessen: Artist-monk Gessen's Utopia Marie Matsuoka 36

平成二六年度 千葉市美術館の活動 37
Fiscal Heisei 26 Activities of Chiba City Museum of Art

採蓮のいわれ

蓮は古来の画題でありそれを描いた名画が多い。その花は清浄無垢、また枯れては寂寥の情をもたらす。

千葉は古代蓮の種が発掘され現代に命を復活した町であり、奇しくも千葉市美術館は古には蓮池（はずいけ）と呼ばれ蓮の漂う池を埋立てたといういわれの繁華街に位置する。音通する *蓮池* は美声をして船乗りを誘惑し難破させるギリシャ神話の海の精である。蓮を採るが如く古今の美を紡ぎ、妖精の如く人を魅惑する芸術に就いて論ずべく本誌の題を定めた。

千葉市美術館

The Implication of “Siren”

The lotus has been the theme of painting, and there many master works which delineate it. Its flower is pure and innocent, and gives the feeling of loneliness and silence after it is withered. Chiba is where ancient lotus was discovered and its life was reinstated. Coincidentally, the Chiba City Museum of Art is located on a street made by reclaiming the lotus field called Lotus Pond (Hasu-ike) in ancient times. *Siren* has same phonetic expression as Siren in Greek mythology who lured mariners to their destruction. The name of the bulletin was decided with the intention to weave the beauties of both present and ancient times as if harvesting the lotus and to discuss the arts which lure us like a siren.

Chiba City Museum of Art

開館二〇周年記念 歴代館長によるシンポジウム

歴代館長よもやま話

熊谷市長 皆様、こんにちは。今日は千葉市美術館開館二〇周年記念のシンポジウムにお集まりいただき、誠にありがとうございます。

この市民会館の大ホールにたくさんの方々がお集まりいただきましたが、私も大変楽しみにし、これほど贅沢な企画はなかなか無いのではないかなと思っています。ちなみに、今日お集まりの方々と、千葉市美術館に行つたことがある方はどのくらいいらっしゃいますでしょうか……ほぼ全員ですか。もし、来られたことが無い方はぜひ、この後千葉市美術館にお越しいただければと思います。

私自身も、市長になる前、なつた後も含めてほぼ毎回のように企画展も含めて見させていただいております。本当に千葉市美術館ならではの、他の美術館ではなかなか出来ない角度から、視点からの企画展を毎度開催していただき、市民はもとより市外、県外にも大変多くのファンの方がいる、千葉市にとつても大変誇らしい美術館だと思っています。

それもこれも、何と言つても今日お見えでいらつしやいます初代館長である辻先生、二代目の小林前館長そして現館長の河合先生、この御三方の様々な積み重ねであり、その下で学芸員の方々が日々研鑽し、そして企画を進めている賜物だと思っています。

今日は千葉市が誇る、そして日本の美術史でも誇る御三方、そして普段から交流の深い河野先生にコーディネーターとして参加していただき、千葉市美術

司 会／河野元昭(京都美術工芸大学学長)

挨拶／熊谷俊人(千葉市長)

パネラー／辻 惟雄(MIHO MUSEUM館長、初代・当館館長)・

小林 忠(岡田美術館館長、二代・当館館長・河合正朝(現・当館館長))

館について、所蔵品や展覧会について語っていただきます。たぶん、二度と出来得ない企画ではないかと思えます。

今開催されている所蔵品展の図録に、御三方の座談会が掲載されています。もうお読みになつた方がいらつしやるかも知れません。私も楽しく拝見しましたが、どうぞこのシンポジウムも存分にお楽しみいただければと思います。聞くところによると、御三方のサインが入つた図録が限定販売されるそうで、希少価値の高い図録となっております。

この二〇周年記念のシンポジウムについて予算審議をした時、こういうシン



シンポジウム会場入口



挨拶する熊谷市長



『千葉市美術館 所蔵作品100選』(2015)に記された歴代館長と河野元昭氏のサイン



(左より)辻初代館長、小林二代館長、河合現館長

ポジウムは大事なんだ、二〇年間の歩みとこれからを考えるためには必要だからということ、市長査定で話した記憶があります。私は普段、財政健全化のために厳しく査定を行っていますが、こういうシンポジウムの予算は確保しないといけないと思いました。そのようなわけで、今日はいろいろな思いがこめられているシンポジウムでございますので、大いにお楽しみいただき、まわりの方にもお伝えいただき、千葉市美術館のファンが一人でも増えるきっかけとなる二〇周年にしていきたいと思えます。

どうぞ、よろしくお願い致します。

河合 皆さん、こんにちは。千葉市美術館の開館は、一九九五年の一月三日ですから、まだ満て二〇年にはなっていませんが、四月から新年度という事で、二〇周年の様々な行事を始めております。この会場は一、〇〇〇名入るということで、ご聴講頂ける方が少なかつたらどうしようかと思っております。落語にありますよね。おいでになった方が前の方で三、四人で寝ていたりする(笑)。そんな心配をしておりましたが、日ごろからの温かい御支援がまさに現実化したようで、こんなにもたくさんの方々に集まり頂いたことに、

本当に感激しております。

美術館が一人前に育つには、結構時間がかかります。一朝一夕には出来ません。初代、二代の館長さんは大変苦労されました。この美術館もスタート時点には若い学芸員の皆さんたちが、よくわからないまま手探りでやっていたのが、今は何を任せても一人で出来るようになりました。先ほど、市長さんが仰ったように、全国的にも認められるような美術館に成長して、来館された皆さんにも御満足いただいています。

僕は、小林さんの後を引き継いで四年目になります。おかげ様で、ほほうまく行っているところから館長になりましたので、さしたる苦労もありません。小林さんから「口なんか出さなくて皆に任せておけば何でも出来るんだよ。まあ、夜には一緒にお酒を呑んであげなさい」と言われ、そんな感じでやっております。

辛い、千葉市美術館は多くの皆さんに御支援のおかげで、ここまで参りました。これからの二〇年は、新しく後継者を養成するとか、次々とその時期に合う企画展をやって行くことに意を傾けたいと思います。欧米では、「美術館は市民と共に有り、市民と共に歩み、市民と共に発展する」などと言われております。しかしながら、日本ではありていに申してこのような文化行政というのは国をはじめ、なかなか日の当たらない、市民の目にもすぐにあまり効果が上がらない仕事のような感じです。

最近、時々話したり、ものに書いたりしますが、美術館という所はそもそも来館者が「優れた芸術作品を見せていただく」と



挨拶する河合現館長

お願いする場所ではないのです。もつと市民に近く、今の言葉でいうと生涯学習や高齢者福祉にも十二分に役立つ施設である訳です。記憶に残っているような古い建物を観たり、懐かしい景色が描かれている絵や写真を観ると、記憶が甦り高齢者の方々が新たな力を得る、元気におなりになるというような事も言われております。決して敷居の高い場所ではないことを、皆さんにはぜひ御理解頂き、御協力を頂いて、皆さんと共に美術館は歩みを進めて行かなくてはならないのだと日頃から自分に言い聞かせております。我々スタッフ一同は丸となって、皆さんと共に歩む事の出来る美術館にしたいと思っておりますので、今後とも御支援を賜りたいと思っております。

これから、私も加わって「よもやま話」を行います。何を話してもいいという事ですが、そのへんのところは本日の司会をお願いした河野元昭先生がいかコントロールして下さるかです。ちよつと心配なのは、ご自身が暴走するんじゃないか(笑)。まあ、それはそれで楽しいと思えます。時間いっぱいお楽しみ頂ければ有り難いと思えます。先程、市長さんからも御案内がありましたけれども、図録も立派なものが出来ておりますのでお手にとつて御覧になつて頂きたい。と同時に、この後お時間がある方はぜひ私達と一緒に美術館にお出で頂いて、千葉市が二〇年間に集めた貴重な美術品——その中にはチラシの僕の言葉のように「こんな作品があったのか」というものがたくさんございます——を、皆さんが御自分でお集めになった美術品なんだと思ひながら楽しく御鑑賞頂ければ、学芸員・職員達も望外の喜びであると思ひます。

本日はどうも有難うございました。また今後ともよろしくお願い致します。

*

河野 皆さん、御機嫌よろしゅうございます。

今日は千葉市美術館開館二〇周年記念シンポジウムという事で、どのような

内容で話そうかと私達で相談しましたけれど、結局よもやま話が一番面白く、また皆さんにも楽しんでいただけるのではないかとこの結論に至りまして、「三館長よもやま話」というタイトルに致しました。

しかし、勝手にやっちゃいまして最後が心配になりますから、今までに一番印象に残った展覧会・作品、あるいは館長として苦勞した事・楽しかった事に焦点を当てて話そうと決めました。

それでは早速ですが、辻さんから始めていただきます。そうですね、一人最長三〇分ということで。

辻 そんなに長く話せないよ。

初代という事でこの席におりますけれど、一九九五年に館長になりました。もうじき八三歳になります。アタマの使用期限が切れそうで、お見苦しい事と存じます。固有名詞がどうも出て来ない。でも初代が出て来ないと格好がつかないという事で、馳せ参じてまいりました。よろしくお願い致します。

それで、印象深い事はたくさんあつて……特に最初、私は京都の国際日本文化研究センターにいたんですが、故がありまして本館に開館の直前ぐらいに館長を仰せつかった。

着任すると、開館を記念して巨大なプロジェクトが着々と進行中でした。それが、「喜多川歌麿展」(2)。

当時はバブル崩壊の時期ですけれど、千葉市はその崩壊が遅れたんです。それで予算がまだたっぷりあつた。私はそれを聞いて、来る気になったんですから(笑)。それで、「これは色々買えるだろう」と思っていたのですが、来た時



河野元昭氏

に言われていた予算が半分になって、その次の年にはまたその半分、次の年にはまた半分……私が任を解かれる時には一、〇〇〇万円ぐらいになってしまっていた。

まさにバブル崩壊の過程の中で私は館長になったわけですが、幸い準備段階で相当いいものを買っております。私が来てからは、目ぼしいものは何も買えなかつたんですが。準備段階で購入したものが、今度の一〇〇選のほとんどではないでしょうか。私が来てから購入したのは、例えば曾我蕭白《虎溪三笑図》③。これは良いものが買えましたが、こういうものは数えるほどしかありません。それから円山応挙《富士三保図屏風》④。これは破墨というか、フワーツとした、応挙の絵とは思えない珍しい作品です。これは安かつたので購入した(笑)。一〇〇選を繰りますとそんなものがチョコチョコと出て来ます。

しかし、渡辺華山の《佐藤一斎像画稿 第三ノ第七》⑤、これはすごいもので。華山の肖像画は完成作よりも画稿の方がはるかに良いと言われているんで、それが画稿の段階のものが五点もある。これは一体どうしたことかと思つたら、小林先生の時に……

小林 違う違う。

辻 河合さんの時？

河合 小林さんの時に僕が紹介した。

小林 正しくはですね、河合さんのお友達から……河合さんの一種の……何て言うんだらう、あれは。河合さんを次期館長には予定していなかつたけれども、前もつてのプレゼントみたいな形で紹介してくれたんだね。

辻 ああ、御就任祝いで。

河合 いや、僕はそういうことを企んで先に送り込んだわけじゃないから。

辻 いやあ、これは重要文化財になつてもいいよ。これは寄贈と言うことにな

るの？

小林 寄贈。

辻 素晴らしいじゃないの。これで千葉市の財産がグッと増えた。

購入した作品は、まだバブルの時代で高かつたけれども、棟方志功の《釈迦十大弟子二菩薩》⑥なんて、今買つたら……この間、売立て目録を見ていたら一〇億円とか出ていた。西山さんという係の方が近代版画を専ら集めていて、五回にわたつて自分で集めたものを基に近代版画展をやつた。あれを本にしたら、日本近代版画のすごい記念になる。棟方志功はどんどんうなぎのぼりに値が上がっているんですね。これが千葉にあるという事はすごい事です。そういうものを西山さんが随分買われて、功績大であります。西山さんだけを誉めするわけではなくて、他の人も誉めなければならなくなるんでこの辺にしておきますけれど(笑)。

それで印象深い、思い出の展覧会……今、細見美術館——京都の方の美術館ですが——というのがありまして、そのコレクション展をやつた時に、その細見さんのコレクションだけでは「ちよつと足りないかな」と思い、アメリカのクリーブランド美術館に行つて、渡辺始興の《燕子花図屏風》を借りて来た⑦。これは私が想像していたよりもはるかに良いもので。

河野 傑作ですね。

辻 これは京都で開催される琳派四〇〇年展で借りるんじゃないかな。

河野 ちよつと、海外の作品はなかなか難しくして。

辻 ああ、難しくなつたか。

河野 ですから、細見美術館展に展示された時が最後になるんじゃないかと思う。今、海外のものは難しい。

辻 これは海外に流失した琳派の作品の中でも、惜しいものだと私は思いました。

河野 今、『國華』でクリーブランド美術館の特輯号を出そうとしていて、辻さんにシャーマン・リー論を書いてもらった。小林さんがその号でこの作品について解説を書いています(9)。

本日皆さんにお配りした私の紹介文に、『国華』主幹とありますけれど、そこに「前」と入れておいて下さい。今は小林さんが主幹です。

辻 まあまあ(笑)。

最初の歌麿展はさすがに予算をかけて力を入れただけに、五万人ぐらい入ったかな？ 随分長い間入場者数一位の記録だったんですけど、その次に「Tranquility」という現代美術の展覧会(10)をやったら、本当にガラガラで。しかも時期が二月の寒い時で、tranquilityというのは英語で寒々とした静寂さと言ったような意味なんです。まさにその通りの展覧会になっちゃった。それで担当の学芸員の方も、ガックリで。その時にはいい作品が出ていたんですけど、杉本博司という、今有名な写真家が海の水平線を撮った連作とか(11)。

河野 あの時出ていましたね。

辻 傑作ですけども、そういう作品が出ていた。しかし、なかなか……私がいた頃の千葉市の方々は、展覧会なんてのは東京に行つて観るものだと思つておられたらしくて(笑)。まさか、こんな千葉で展覧会なんてものがあるとは……こちらはいろいろ企画を立てて頑張つたはずですけど、やつてもやつてもお客さんが来ないという(笑)。そう言う状態で小林館長にバトンを渡した事を覚えております。

それはさておき、その中でも「東山魁夷展」(12)は比較のお客様がたくさん来られて。東山さんが最晩年の頃です。市川のお宅にお邪魔したんですが、残念ながら東山さんはご病気でお会いできなかった。間もなく亡くなられたんです。しかし、奥様が一所懸命協力して下さい、この時には本当にいい作品が出ています。

河野 そうですね。

辻 これを観た人は本当に良かったと思う。特にこの《残照》(13)。

私、これは感激しました。これは戦後間もなくの作品で、狭い家の二階で制作していて、出来上がつた時に持ち出そうとしたけれど大きくて表に持ち出せないで窓から下ろしたというエピソードがある。これは東山さんの最高傑作の一つだと思つております。

それから、もう一つは《道》(14)です。これは余りにも有名な作品で、もちろん展覧会に出品して頂いた。改めてこの作品を見て感激していたんですけど、そのときの展覧会の特色は、本画を描くための下絵・デッサンの類がたくさん展示されたことです(15)。《道》の場合でも草の一本一本まで本当に綿密に写真された下絵が残っていて、「これぐらいの準備があつてああいう傑作が生まれただんだな」と思いました。

思い出の展覧会はそのくらいにしておきますが、館長として辛かつた事、逆に楽しかつた事……私の場合は辛かつたという印象は妙に無くて、楽しかつたのは、当時の学芸員の皆さん、とくに女性学芸員の皆さんが若くてピチピチ澆刺としておられたんです。これが私にとつて大変、目の保養というか(笑)、まあ、今でも皆さんお元気でいらつしやいますけれども、当時は特に。

河野 辻さんも若かつたわけだね。

辻 まあ、比較的ね。今よりは。

それで、これからの美術館に望む事は……美術館つてのは、ここの美術館？ 美術館一般？



「東山魁夷展」(1998)チラシ

河野 そうですね。どちらでも良いでしょう。

辻 一般なんて言うとは大変な事になる。この美術館は今、私の頃に較べれば羨ましい位で、リピーターもだんだん増えて、二〇周年記念にこれだけの方がホールを埋めるといふ、私の時には信じられない現象が起こっているの……やっぱりこれは、二代目館長の小林さんのご尽力・功績だと改めて脱帽致します。

河野 これから千葉市美術館に望む事は特に無いという事でよろしいでしょうか？

辻 やっぱり、私の時の経験ですけれども、どんどん購入予算が削られてゼロ同様になったというの……あれ程悲しい事は無いんで。やっぱり学芸員は予算が無いと、新しく買う事が出来ないと、やる気がだんだん無くなって来る。小林さんの時もそういう状況の中で良く頑張った。本当に偉いと思う。ですけれど市長様にお願いをして、これからは少しでも予算をつけていただきたいと……

(会場拍手)

河野 拍手、有難うございます。

辻 と、言う事でございます。

河野 はい、有難うございました。

初代館長、辻さんでした。皆さんご存知のように、辻さんは「奇想」ですね、特に伊藤若冲の発見者として知らない人はいない研究者です。そして今年……去年になりますか、『奇想の発見』という一代記、オートバイオグラフィを新潮社から出版しました⁽⁶⁾。今、Kindleでも読めるようです。皆さん、ぜひ一読をお薦めしたいと思います。

続いて、二代目の小林館長にお願いしましょう。

小林 小林です。皆さん、お久しぶりです。

今、辻先生が仰られたんですけど、美術館がスタートして間もない時期は本当に、お客様がなかなか館に来て下さらない事で、館員一同悩んだ事を思い出します。館長に就任したばかりのある時、市内の高等学校の父母会へゲストとして招かれて、先程辻先生が仰ったような事をちょっと申し上げたんです。「皆さんは東京の方ばかり見てるんじゃないですか、地元にも、皆さんの市の美術館があるんですよ」というような悪態をついたんです(笑)。そうしたら、終わってから数人のお母様達が詰め寄って来て、「私達は誇りに思っているんですよ。何度も行ってます。そんなに東京ばかり見ていません」と言われて、「ああ、大変失礼しました」と。逆に励まされ、嬉しかった事を思い出します。

辻先生は準備段階からいわゆる準備室長として開館まで持つて来られたわけなんですけれども、私の頃は一騎当千の館員の方達が、ちょうど充実に入って来た時なんです。お辞めになられた浅野秀剛さんをリーダーに、その下の人は皆さん若い盛りで、次々と良い企画を出して徹底的に調査して、充実した展覧会を行う。ほぼ同世代、横並びですから、一人が行うと負けてはられないってんで、また頑張る。

河野 話に出た浅野秀剛さん、この会場にいるはずだよな。

小林 浅野秀剛、田辺昌子、浮世絵の世界では第一人者、第二人者というような人達が準備段階で集めた浮世絵コレクションは、本当に千葉の誇りとする財産だと思えます。その頃はバブルが弾ける前？ 千葉バブルが弾ける前で、年間の購入予算が何億円とあったんです。手当たり次第良い物が買えた、羨ましいような時期でありました。

第一回の開館記念展「喜多川歌麿展」は、大英博物館と千葉市美術館、赤ちゃん美術館が天下の大英博物館と共同で開催⁽⁷⁾した。年表にありますけれども、一九九五年の開館記念展は五四、二八七人の入場者があった。

辻 ちょっと加えますが、この展覧会は実は小林さんが企画して、小林さんと浅野さんでやったような展覧会なんですよ。

小林 いやいや。

辻 私が来た時は、もうちゃんと準備が出来ていて、何もしないで開館にこぎ着けた。それが、事実です。

小林 だつたかなあ(笑)。まあ、浅野秀剛とティモシー・クラークという——彼は私が学習院時代の教え子で、第一号の留学生だつたんですけれど——二人が徹底的に調査してやった展覧会です。その時のカタログは、二冊本が一つの箱に入っているんですけど、今でも歌麿をちよつと勉強しようとしたら、その本を座右に置かなければならないというような大変充実したカタログですが……展覧会が終了する間際になって、大量に追加印刷してしまつたんです。まあ、美術館の運営に慣れていなかった。ですから今でも買えますので(笑)。ぜひ歌麿を愛する方は、一冊。安いものですからお買いになると良いと思います。

辻 あれは、春画が入っていないのが残念なんですけども(笑)。しかし、素晴らしい物揃いで。

私が辞める時にも、倉庫に図録がこーんなに山積みになつて(笑)。

小林 抑えて、抑えて(笑)。大英博物館のカタログには、春画がちゃんと載っていたんです。ところが千葉市の美術館ではそこをカットして、陳列も出来なかった。

辻 そうね。



「喜多川歌麿展」(1995)チラス

小林 熊谷市長はとても理解があつて、「小林さん、千葉市美術館で春画展やらないんですか？」と仰つたことを今でも覚えています。その頃はとても無理でした(18)。

私が館長になってから、二〇〇二年に「鈴木春信」展を開催しました(19)。これは田辺昌子さんが担当で、素敵なポスターや図録が出来て。あの頃運営費はまだ潤沢にありましたので、アメリカ国内はもとより、ヨーロッパにまで調査に行き、良質な浮世絵版画をたくさん外国の美術館からお借りする事が出来た展覧会でした。琳派四〇〇年で国立博物館が外国から借りられないつてのは、恥ずかしい。

河野 いやあ。しかし今、如何ともし難い状況になっています。

小林 その四年後の二〇〇六年に、「浦上玉堂」展を開催しました(20)。ブルーノ・タウトという建築家が戦前日本にやつて来て、日本に新しい目を注いだ人なんですけれど、彼が玉堂の事を「東洋のゴッホ」と評価しました。それほど自由な心と筆を持っていた人です。私の一番好きな日本の画家であり……この人、酒呑みなんです(笑)。朝から呑んでいたという。私は夜を愛しているんですけど、彼は「卯酒楽」。卯の刻というのは午前六時です。朝起きてすぐ一杯やるという。すごい人ですね。詩人であり、七絃琴を弾く音楽家であり画家でありました。浦上玉堂は楽器も自分で作つたんです。琴をたくさん作つて知人に売る楽器屋さんでもあつた。

それで相当儲けていたんじゃないかと思うんですが、松尾知子さんが担当の学芸員でしたけれど、その琴を七張も集めてくれました。おかげで、浦上玉堂の全人的な展覧会が出来た。



「浦上玉堂」展(2006)チラス

川端康成先生が所蔵しておられた国宝の《凍雲篩雪図》という、篩ふるに掛けたような雪が降っている寒々とした光景の作品ですが、これを借りるのが大変でした。《凍雲篩雪図》が無い玉堂展は、山葵の無い鮭みたいなものです。ピリツと来ない。で、お願いに上がって展示のお許しを頂いて——確か一週間だけだった——千葉市美術館の会場を飾る事が出来ました²¹。

更にその四年後に、ご記憶の方も多と思いますが、「田中一村」展²²をやりました。全く無名のまま、奄美の島で亡くなった田中一村は栃木で生まれ、東京で活躍し、千葉に来た。千葉の人達に支援され、助けられて奄美大島に行き、そこで生涯を終えた。現代の浦上玉堂と申しましょうか、自由な、純粋な人だったんです。美術館の年表によりますと、この田中一村の展覧会で開館記念展以来の最高入場者数を更新しました。六一、一六六人。辻先生に会った時に、「とうとう辻さんを超えたよ」と言いました(笑)。

辻 さつき言ったように、歌麿展というのはあなたがやったんだから(笑)。小林 辻先生はその時、ムツとされまして。「何ッ」という感じで(笑)。「いやいや、田中一村展(の入場者数)は開館記念展を超えましたよ」と言ったんです。

「田中一村展」の頃はちょうどインターネットがメディアとして機能するようになった時期でした。若い人達による「田中一村展に行つてないの?」「今すぐ行け!」というブログの書き込みが相次いだ。

その他にも色々……「橋口五葉展」という素晴らしい展覧会²³は西山純子さんの企画でしたが、鹿児島市美術館と共同で開催しました。橋口五葉は鹿児島の出身で



「田中一村 新たなる全貌」展 (2010) チラシ

す。夏目漱石の本のブック・デザインをしたり、「新版画」という運動の先駆けとなった人です。その展覧会もなつかしく思い出されます。

余り長くなってもあれですが、館長としてつらかった事というのは、お忙しい熊谷市長が帰られてしまつて……畳み込もうと思つたんですが(笑)、購入費がゼロになつてしまつた事です。今は多少あるの?

河合 多少(笑)。

小林 私の頃は完全に無くなりました。辻先生がさつき言つておられたように、最初は雀の涙ほど付いていたんですが、それで多少。辻さんはやんちゃなものを買つてくれてたんです。若冲とか、蕭白とか。私は根が真面目なものですから、文人画。河野さんが『國華』に書いてくれた中林竹洞の襖絵²⁴とか、浦上玉堂の小さな絵ですけど《東雲篩雪図》の前段階のような絵²⁵を買つて貰いました。

楽しかった事は……館員ばかりではなくて、館を支えて下さる方が現場にたくさんいらつしやいます。シンポジウムの前に司会をやつて下さった方などもあるんですが、受付や監視の方、それから何よりも美術館を訪れてくれる市民の皆様、コレクションを寄託・寄贈して下さいする方々……いま私が館長を務めている岡田美術館は箱根の小涌谷という所にあるんですが、千葉市美術館の友の会の方が来て下さつたりします。時々、「千葉市美術館でお会いしましたよ」と、声を掛けてくれる方もいらつしやいます。また、作品購入のお金が無くなつても、そういう多くの方に支えられた事を、大変嬉しく思つております。

辻 ちよつと今、小林さんが岡田美術館の宣伝をされたから……私はいま滋賀県の山の中の信楽という所にある、MIHOMUSEUMという、宗教団体が運営している美術館の館長をしています。そこで今、二〇世紀アメリカの抽象表現主義の巨匠であるバーネット・ニューマンの代表作《十字架の道行き》、

キリストが十字架に磔になるまでに休み休み通った一四の駅を連作で表現したものを展示しております(26)。これは本当に偶然の結果で、私共の美術館だけでやっておりまして、空前絶後の機会ですから、もし現代美術に関心がある方であれば絶対見逃さないように(笑)。

河野 千葉市美術館でも現代美術の展覧会は随分やつてらっしゃる。

M I H O M U S E U M は建築が大変素晴らしいですが、千葉市美術館の建物は元々区役所だったんでしようか？

小林 銀行。

河野 銀行だったんですか。それを大変巧くりノベーションをして、本当に素晴らしい……

辻 建築家の大谷(幸夫)先生で。

河野 そうですか。建築家の御名前は存じ上げなかったけれど、古い建物にリノベーションを行って美術館として使うという事は、日本で早い時期、初期の例でしょう。建物と美術館・ギャラリーが大変巧く行っている。一方、M I H O M U S E U M は I・M・ペイという素晴らしいチャイニーズ・アメリカンの建築家による作品で、これはもちろん新しく建てられたもので、建物も鑑賞の価値があると思います。

辻 千葉市美術館の一階には「さや堂ホール」がありますが、あれは古い建築を残さなければならないというので、一〇〇メートルぐらいエッサエッサと動かした。そのための費用も膨大だったらしいけど。

河野 そうだったんですか。

辻 あの「さや堂ホール」は歴史的記念建造物だからね。

小林 刀の鞘と同じ構造になっている、元の銀行の建物を残してその上に新しい建物を被せた。銀行を一度動かしているんです。

辻 「さや堂ホール」でしばしばコンサートを行いまして、「曾我蕭白展」の時

には大野一雄という有名な舞踏家があそこで公演された(27)。それはなかなかすごい公演だったことを思い出します。

河野 私はそれを見逃したけれど、素晴らしかったでしょう。

辻 ええ。

河野 私は、千葉市美術館は建物、ギャラリー、これも誇るべきものだと思います。

続いて河合さん、お願いします。

河合 「さや堂ホール」についてお話すると、私はひととき古い建築物の保存する運動に関わったことがあります。古い建物の保存にはいろいろな方法がありますが……その一つの考えとして建築にはファサード保存、つまり外側がちゃんと残っていればいいという考え方があります。鳩山邦夫さんが総務大臣だった時、東京駅にある中央郵便局の解体工事を一時中止して、外側だけ残した。中はすっかり変わってしまったけれど。そういうビルの例はたくさんあります。そのようなビルを我々は「かさぶたビル」と言っています(笑)。残さないよりは残した方が良いかと思う程度で、あまり良くありません。しかし、「さや堂ホール」は鞘の中に入れていくために、全部残っている。これは非常に重要な事です。残すのならそうしなくてはいけない。ただ「さや堂ホール」の場合、銀行として使われていた後は市の施設となったため、内部は少し変わっていますが、オリジナルな部分がかかり残っています。

古い建築ならば、日本には飛鳥時代に建てられたお寺は今日残っています。近代のものはほとんど壊されるんです。それで果して良いのかどうなのか、これは国の方針が悪いのか、建築屋さんが仕事を増やすための下心なのか、何でも耐震、耐震と言う。でも耐震なんて言ったら、こんな地震国で奈良や平安時代の建物なんか全部潰れている筈なんです。だから知恵を働かせれば何百年でも何千年も建物は残ります。せつかく耐震や免震にしたら、「免震に

使ったあのゴムが悪い」などと言う始末です。その仕掛けは一体誰が行っているのか？ この会場に建築屋さんがおられたら申し訳ないけれど、何かの陰謀があるんじゃないかな(笑)。残そうと思えば建物は残るんです。

建物には、その街にとつてのシンボルあるいはランドマークとしての重要な働きがあります。千葉で生まれて育った、あるいは千葉を訪れた皆さんにとつて記憶に残るシンボル。

先程申し上げた、老人が昔を懐かしむのはその街にある、あるいはかつてあった橋とか建物なんです。「あの時はこうだった」、「あの時はここを市電が通っていた」という事で記憶が蘇る。河野さんの御母様はご高齢ですけれど、お住まいの大田区では老人に大田区の古い景色を写した写真帖をくれるんです。私は素晴らしい事だと思う。

河野 よく知っているね。

河合 美術館もそういう存在・施設であるべきだと思っています。

私は司会者ではありませんけれども、こちらへんがちよつと河野さんのコメントを訊きたいですね。その後でまた私達が話した方が良いと思います。

(会場拍手)

河野 私は先程話にあった「喜多川歌麿展」以来、少なくとも千葉市美術館で開催された江戸絵画、近世絵画の展覧会はほとんど拝見していると思います。それから最近拝見した展覧会では

「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」(28)に感動しました。

絵本というものは日本でも大変古いメディアの一つだと思いますけれど、その伝統が現在の日本作家の中にDNAのように受け継が



「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」(2015)チラシ

れていて、素晴らしい作品がたくさんある。この前拝見した展覧会では、グラプリは受賞していなかったけれども、二人の日本人が「金のりんご賞」を受賞していた。その作品を諸外国のものと較べてみると、やはりそこに日本の美、日本人の美意識というものがはつきりと看取される。

この会場にも絵本原画展をご覧になった方がたくさんおられると思いますけれど、千葉市美術館の一つの特徴は版本や浮世絵版画という複製芸術のコレクションが大変充実している事で、これは日本の美術館の中でトップクラスのコレクションだと思います。それをリードして優れたコレクションを作ったのが初代館長の辻さん、二代目の小林さんであり、先程名前が出た浅野秀剛さんであるわけです。小林さんの方から橋口五葉の話が出ましたけれど、今まで話題になった多くの作品は一点もの、広い意味では「肉筆」と呼ぶべきものですが、複製芸術のコレクションも大変優れたものであり、千葉市の皆さんは誇りに感じて欲しいと思います。

私の最も好きな千葉市美術館のコレクションに鈴木其一の《芒野図屏風》(29)があります。小林さんがプロデュースした其一の展覧会については後ほどお話したいと思いますが、特に一つ挙げるなら、ラヴィッツ・コレクションです。ラヴィッツさんはアメリカの方で、私は当時横浜で活動していた平木浮世絵美術館でこのコレクションを初めて見て(30)素晴らしいコレクションだと思いましたけれど、それが一括して千葉に収まった。これは大変良かった事だと思えます。この時、千葉が収集しなければコレクションがでんでんばらばら、雲散霧消してしまつたに違いないわけです。これも千葉の皆さんのおかげだと、私は深く感謝しております。

私は秋田県立近代美術館——頭文字を取ってAKBと言いますが(笑)——の館長を八年ほど務めました。そこで私は職員に「美術館のコレクションは美術館が所蔵してはならない。県民が持っているもので、それを美術館がお預

かりしているのだ」と、よく言いました。千葉市美術館のコレクションも正しく同じであり、所蔵しているのは市民の皆さんなんです。それをたまたま、この美術館がお預かりしている。このような性格が千葉市のコレクションにあるわけで、その点をもっと誇りに思い、お友達あるいは市外・県外の方々に御吹聴していただきたいと思えます。

その秋田県立近代美術館のホームページに、「おしゃべり名誉館長」というブログがありますので、ぜひ御覧ください。その過去のおしゃべりにブラテイスラヴァ世界絵本原画展のことが載っていますが、私はそこに、この展覧会と千葉市美術館、そして学芸員と市民に対するオマージュを捧げています。

それでは、河合さん(笑)。

河合 ここで河野さんのお話を伺うことが出来て良かったです。

私は先程お話したように、辻さん、小林さんの後を承けて、比較的安定した時期になってから館長になりました。余り苦勞もないし、作品を購入出来ないなんていう事もいわば常態化していましたから、別に悲しくも何ともなかったんですが(笑)。それがどういう事か。学芸課長が「先生、何か購入できるらしいです」と言うから、「それなら例え一〇万円の作品でもいま欲しいものがあるれば購入しなさい」と答えました。要するにこれ、「呼び水」ですから。今ここで何千万円かの作品を購入したいと言ったら莫迦と言われます。「なるべく安いものを買ってから、次々とやるんだよ」と、言っしまいましたけれど。どうなんでしょう、幸い市の御理解を得まして……千葉市も多少経済的に好転したんでしょうか。それはともかく、お二人の時代とは少しは違って来たわけですか。

小林さんは大学を出てからのスタートが博物館で、それから大学の先生になった。千葉市美術館の館長さんの時には大学と兼務していらしたんです。この、先程からお話している御三方は学校が一緒で大変親しいんですが、どうい

うわけか僕も仲間に入れていただいて、時々呑んだり何かしている時、小林さんが盛んに「美術館を経験しないと美術史はわかんないよ」なんて(笑)。そうすると辻さんが「羨ましいなあ。東大辞めて東博に行きたい」なんて仰ったりして。そして辻先生がまず、大学を退官されて後、この館長さんになった。「ああ、辻さんが館長になったなあ」、「そうだねえ、いいなあ。河野さん、俺達も行きたいなあ」と言っていた。そうしたら河野さんが大学を定年退職されて、まんまと秋田県立近代美術館の館長になった。「ああ、俺だけ残されたなあ」と思っていたら、嬉しいですね、小林さんが後進に……

河野 後進と言っても、お互い昭和一六年じゃない。

河合 いや、こちらの方が年上なの。僕は誕生日が遅いですから。

河野 ああそうか。

小林 六ヶ月だけなんです。

河合 七〇歳過ぎて、こんな仕事は無理じゃないかと思っていたら、「まあ大丈夫ですよ」と市の方も仰って下さったんで、その気になっちゃって。

ですからどちらかと言うと、私は自分が館長の時の展覧会なんかよりも、就任前の展覧会の方に強く印象に残る展覧会がいくつもあります。その意味では河野さんと非常に近いです。館長になってからの思い出深い展覧会をあえて挙げれば、一つは「仏像半島」^[3]です。仏像、仏様の展覧会。これも歴代四位ぐらいの入場者数で沢山の方が見えた。沢山人が来れば有り難いし、嬉しい事ですけど、ただそれだけではなくて



「仏像半島—房総の美しき仏たち」展(2013)について語る

……その前にも小林さん？ 辻先生の時に仏像の展覧会をやって、その時は惨憺たるものだったという話らしいですけど。

辻 「房総の神と仏」⁽³²⁾というタイトルでやりましたけれども、それほど惨憺たるものではなかった(笑)。私が館長としての最後の展覧会で、ちょうど展覧会が開いた頃に私は多摩美術大学に移っていましたから尻切れトンボになってしまいました。浅野さんと二人で房総のあちこちの仏像を観て廻りましたが、房総は仏像の宝庫と言うか、飛鳥時代からのすごいものがある事が判って、私の館長としての最後の思い出になっております。

河野 辻さんがやった時は一九九九年。
辻 そうそう。

河野 素晴らしい展覧会でした。辻さんの第一回目の仏像展が発端となって、『國華』という美術雑誌で地方別佛像特輯がシリーズ化されることになったのです。『國華』は明治二二年に岡倉天心が作った、現在まで続く世界で最古の美術雑誌で、この間一四三四号が出ました。『國華』の前にフランスで創刊された『Gazette des Beaux-Arts』という雑誌がありましたけれど、二〇〇二年に廃刊になってしまった。『國華』の約一〇年後にイギリスで『The Burlington Magazine』が創刊され、それは今でも続いています。もうこうなりや、『The Burlington Magazine』が『國華』を追い抜くことは絶対に無いと安心しているんですが——そのシリーズの第一号が安房・房総の仏像で⁽³³⁾、もう一〇回程各地方別に行っており、まだ色々タネはあるわけです。私の故郷である秋田特輯もやって欲しいところですが、これは一冊になるほどの仏像が集まらない様子で、未だに実現していません。

河合 辻先生の時の展覧会が決して内容的に悪かったわけではありませんが、幸い、私の時の「仏像半島」は大変好評だった。その間に、ものの考え方が段々変わって来たということがあるかも知れません。一つには展覧会に展示さ

れたことで仏像をお守りされているお寺のお檀家さんが、改めてその仏像の価値の高さを認識するようになったと、お寺さんに喜ばれたことでしょうか。そしてもう一つは、二回目の展覧会では、仏像を空間で見せるといふことを、つまりお堂の中の仏像が一つの空間、すなわち世界を作っているということ、展示を通して再現しようと担当の学芸員が試みました。僕も大賛成だったんです。日本の美術というのは、辻先生が「かざり」という概念で仰っておられますけれど、一つのモノだけではなくていくつかのモノが集まって、その時と場所にふさわしい空間的な造形を創り出すという特色があるんですね。組み合わせることで一つの新しい美が生まれるという考え方は、モノを取り合せるという考え方。もちろん仏像や仏堂の荘厳^{しやうげん}もそうであって、一尊でなく、脇侍^{わきじ}や眷属^{くわんじゆく}が集って仏の宇宙を構成する。そのような視点の新しい展示方法や見せ方を試みたからだったのかと思います。

御存知の方もいらつしやると思いますが、これが実は現代美術におけるインスタレーションという考え方は、あるモノに他のモノをつけ加える、あるいは既存(成)のモノにアーティストが新しく何かを添える事で両者の調和とか両者が創り出す造形的な世界・空間を提示する。

ここにお集まりの皆さんも、「現代美術?」"どうやって観たらいいの?"と思われるかも知れませんが、須田悦弘^{すだえつこう}という、未だ四〇歳代の若いアーティストは木を素材として花



「須田悦弘展／須田悦弘による江戸の美」展(2012)チラシ

などを彫って、それを色んなところに……例えば、美術館でお預かりしている椿の屏風の前に自分で彫った椿を置く。今や彼は大変売れっ子になりましたけれども、この須田悦弘の展覧会（35）なども私が館長になってからの印象深い展覧会です。もちろん

ん、彼は他の美術館でも作品を発表していますけれども、千葉市美術館として訴える力のあつた展覧会だったと思います。現代美術を企画しても人が入らないと言われていたのです。

そして須田悦弘は現代美術ですけど多くの人が……僕は学芸員達に、色んな人が色んなところで入場者数の事ばかり言ってるけれど、そんなものを気にしては駄目だと言っています。テレビでもすぐ視聴率について言いますけれど、本当はそんな事は関係無いのですよ。辻 ふふふ。

河合 ただ、自分が一所懸命になつて良い展覧会を作つた時、誰も来てくれなと悲しいです。だから、展覧会を作っている側としては、もちろん多くの方が来て、喜んで御覧いただく事は良いことなんですけれど、「何人入つた」という事を目指すような展覧会をやる意味は無い。それは東京国立博物館がやればいい事で、千葉市美術館がやる必要は無いんです。

河野 須田悦弘は素晴らしいアーティストだね。入館者数という事はともかくとして、市民の人に喜んで貰えましたか？

河合 と、思います。だから現代美術でも判り易いというか、辻先生が仰る「かざり」、日本人の美の鑑賞方法としての「かざり」が理解されたと思います。



「酒井抱一と江戸琳派の全貌」展 (2011) チラシ

河野 須田さんはコンテンポラリー・アーティストとはちょっと毛色が違つて

……
河合 そうそう。

河野 MOA美術館で河合さんが関係された尾形光琳の《燕子花屏風》と《紅白梅図屏風》の両国宝を陳べた展覧会⁽³⁵⁾では、《紅白梅図屏風》の前に梅の……

河合 あの花びらね。

河野 あれも素晴らしかったな。本当に感動しました⁽³⁶⁾。

河合 若く、今的なアーティストの展覧会も学芸員は積極的にやつております。

河野 須田さんは特に千葉市とは関係無いけれども展覧会を開催したわけですね。

河合 うん。それは学芸員の水沼君が大変に関心を持って取り組んだから。それともう一つ、これは批判として受け取っていたけど困りますが、会場の皆さんも非常に関心を持たれ、高い評価を得ている田中一村については。一村の展覧会は沢山の方が来て感動されたけれど、本当に天才だったと思います。当時の東京美術学校、今の東京藝大に入学した。同期生は、先程も紹介された東山魁夷をはじめ、加藤栄三、橋本明治、山田申吾など、その後の画壇をリードする人達だった。

残念なのは、一村は美術学校に入つてすぐ辞めてしまう。
小林 半年ぐらいだね。

河合 これを経済的な理由であると言う人もいますが、恐らく一村は天才児で、同期生のように普通の学校を出て美術学校に入つてから「写生をしながら」と先生に言われて石膏デッサンなんかさせられることに対して飽き足らない思いがあつたのではないか。何か、もつと刺激的な教育を期待していたと思

うんです。既に彼は一〇代、あるいはもつと小さい時から？

小林 神童と呼ばれていた。

河合 素晴らしい絵を描いている。でもそれは、昔風の絵の習い方、粉本主義だった。手本に倣って描くというやり方です。神童で、当然素晴らしい絵ですから、売れます。そんな売画の生活では貧しくなかつたと思いますけれど、そこから辺のギャップで彼は学校を辞めた——と、僕は推定したんです。

ですから、画家にとつて「絵が売れる」という事は、果たして長い目で見たらどうか？ これも、一村の展覧会で感じました。もし、東山魁夷や加藤栄三、橋本明治などと共に学校をちゃんと卒業していたら、もつと素晴らしい画家になつたに違いないと思います。絵を見てみると、やつぱり粗い感じがするんです。銜いがある。だから、そういうものを全部捨て去つて奄美に行つて、目が開いた。貧しくて、絵具も碌ろくに無く、それに同情した友人の絵描きが絵具を送つたとか、色んな話がありますけど、有り体に言つてそんな状況の中で奄美に渡り開眼した。

田中一村の作品を見ると素晴らしいと思うけど、画家が良い絵を描いたり、良いものが後世に残るといふ事は難しい、本当に芸術家は大変だとすごく感じます。ですから、千葉市美術館での一村展は色々な事——一村の残念なところを批判ではなくて——美術の大変さ、難しさみたいなことを学んだ展覧会でした。

もう一つは、寄託品でお預かりしている作品なんです、勅使河原蒼風です。華道・草月流を開いた人ですけれど。その人の書があるんです。それが素晴らしいと思いました。これは、勅使河原蒼風展というような特別展ではなくて、平常的な展覧会に陳んでいたんですけれど、非常に感動しました。ですから美術館はある意味平常陳列的なものに自分の美術館が所蔵している名品を出して、特別展などのブログの情報に煽られない人が来て感動するような作品を

いつも陳べてお持ちしているという事が大事であると思いました。

まあ、美術館に憧れて、美術館で働くことが出来るようになりましたけれども、その短い体験、あるいは鑑賞者として、美術館を見ていた中で面白かつた事、素晴らしい作品などについて問われれば、そんな事を思い出します。

それから、辛かつた事(笑)。楽しい事は一杯あつて辛かつた事は碌に無いんですが……やつぱり辻さんや小林さんが御苦労されて、いま年間で一五、六万から一八万人の入場者がある。僕がちよつと関係している東京都内で立地条件の良い私立の美術館、例えば出光美術館や根津美術館は、人が沢山来ると言つても年間一五万から二〇万人なんです。それでも、相当な努力をしないとそんなに入らない。彼らは、千葉市美術館の年間の予算の数倍の予算を掛けてやっているわけです。それで立地条件が良い。駅から一五分も歩かなければならぬような事は無いけれど、それでもその程度なんです。だからそこまで、この美術館が皆さんに愛される、皆さんに関心を持たれる美術館になつたというのは、館長のみならず学芸員の努力と、それを支える職員の努力以外に無いと思います。

ただ残念な事に、私が経験しなかつた辛い思い出が学芸員達にみんなあるんですよ。だからこちらの提案に対して逃げ腰になる。トラウマなんです。「そんな目立つた事をやると叩かれる」と言うんです。「いや先生はそういうけれども、先生が館長を辞めたり亡くなつたら、私達はまた同じ目に遭う」と。悲しい事です。トラウマが学芸員や職員達に残っているのが辛いし、それを何とか解放しようとしても自分の非力を感じて益々辛くなります。段々に職員の方々がそれぞれに自信を持つてやつて下さると有り難いと思います。楽しい事が多いですけれど、もし敢えて言えば過去の事を引きずり過ぎている。今日集まつて下さつたような、こんなに沢山の応援団がいるじゃないか……

……ちよつと、涙声になつちやつて(笑)。自分の言葉に自分が酔つちや駄目

ですね。

(会場拍手)

河野 私は先程河合さんから振られて「プラテイスラヴァ世界絵本原画展」について話をしたけれども、私が一番面白いと思っただけで、見ている江戸の絵画では鈴木其一の展覧会。其一というか、「酒井抱一」と江戸琳派の全貌」展³⁷が開催されました。御覧になった方も多いいいと思えますが、大変優れた展示と図録でした。先程話が出た「喜多川歌麿展」あるいは「鈴木春信」の図録などを見ると単なる図録ではなくて、いわゆる研究カタログになっている。確かに全部の図版が紹介されたカタログであり、一つ一つの作品解説が付されたものですが、同時にそれが研究の成果となっている。そしてその研究の一部は、しっかりとした脚註のある論文として発表されている。これが、千葉市美術館が大変誇るべき、また最大の特徴であると思っています。

その意味で「酒井抱一と江戸琳派の全貌」は二〇一一年の開催で、もう四年が経ちますが、優れた展示内容、本当にクオリティの高いカタログという事で記憶に残っています。そのカタログでは新しい試みが行われていて、カタログであると同時に単行本として全国に頒布された。これも素晴らしいアイデアであると心に深く残っています。

この展覧会で、私達——小林、河合、河野は「美術史3K」と言われているのか(笑)、自称しているのか——が講演を行うという事になり、小林さんと河合さんは抱一について行うので、私は其一について話しました。最近私は「講演」と言わないで「河野トーク」と言っただけ、殆ど駄洒落トークというか笑いを取る話が多いんですが、その時も若干の私見を入れてトークをやらせて貰いました。トークの後で三人の方が質問して下さいましたが、皆さん「大変面白かった」、「楽しかった」と言っただけ、「為になつた」とか「勉強になつた」なんて人は一人もいなかった(笑)。懐かしく思い出します。

そもそも、「江戸琳派」という概念を発明したのは小林さんです。それまでは皆、「琳派」と呼んでいて「江戸琳派」という言葉は無かった。それを昭和四七年、東京国立博物館の創立一〇〇周年を祝う大きな展覧会³⁸の絵画部門をプロデュースした小林さんが『ミュージアム』という雑誌に江戸琳派論³⁹を執筆して、それ以来、抱一、其一、池田孤邨といったグループを「江戸琳派」と呼ぶようになった。小林さんこそ「江戸琳派」の発明者なんです。その大展覧会が千葉市美術館で……ええと待てよ、私は何の話をしていたんだったか。最近ボケちゃつて。

辻 ははは。

小林 ちよつといい？

河野 はい。

小林 今後の千葉市美術館について語り合えないといかん、と思うんです(笑)。

先程、河合さんが仰つたように、「田中一村」展は画期的だったと思います。これはもちろん千葉だけではなくて、当館の学芸員が鹿児島市や栃木市の研究者と共同した。一種神話化、偶像化しつつあった田中一村をもっと実像に即して、徹底的に調査したんです。栃木時代から始まって、東京、千葉そして奄美大島時代と……この美術館の学芸員さんは徹底するんです。近々では赤瀬川原平さん⁴⁰。あれは不幸な時期⁴¹にちょうどぶつかってしまったけれど、まあ、あの展覧会を見ることの疲れたこと(笑)。「よくぞここまで出品作品を集めたな」と思いました。その前には中村芳中の展覧会⁴²がありました。これも、もう「大阪琳派」と称して良いような、大阪出身の琳派の画家ですけれど、「こんなにあつたのか」と思う程に作品を集めて……

河野 うん。あれも素晴らしい、力作の展覧会でした。私はこちらで見ることが無かったため、細見美術館で拝見しました。ギャラリーがこちらより狭い

分、限定されていたんだと思いますけれども。

本当に素晴らしい展覧会でした。

小林 光が当たらなかつたり、あるいは当たり過ぎてしまつて「目眩まし」になつている対象を徹底的に調べ、見つめ直す作業を千葉発信で行つてきたんです。これが二〇年のあゆみであつて、私はこの営みをぜひ続けて欲しい。そしてそれを、皆さんに支持して欲しい。

河合さんの努力で新しい学芸員が二人戦列に加つたという事で、人事を進める事が大変難しい今、千葉市は……

河合 千葉市がそれを理解してくれたから。

小林 応援してくれた？ それは大変有難うございます。今、中々人を採用出来無いんです。若い人を年限で縛つたりして、本当に気の毒で。我々の頃は面接試験というか挨拶しただけで採つてくれたんですけど。

これからも、先輩達が大年を取つて来てしまつてパワーが薄れないように、河合さんの御指導で千葉発信のエネルギーを燃やし続けて欲しいというのが望みです。

河野 うんうん。

辻 そうですね。河合さんは三年前に就任されたんでしょ？ その時に較べると何か三年ぐらい若くなつたような(笑)。

小林 ハッハッハ。

辻 こりゃあ、やつぱり適任だつたという事の証拠なんで。これからも当分、河合さんに……

河野 今、小林さんからも話が出たように、千葉市美術館は「あるべき美術館」の姿、ベクトルを守つていますよ。つまり、学芸員が汗水垂らして調査をして、その成果を発表するという、正しい美術館だと私は信じていますけれども、そういった方向性というものがちゃんと守られている。担保されている。

これが千葉市美術館の最も優れたところだと思えます。歌麿展以来のカタログを見ると研究の成果がそこに結実している。ですから、「日本一の市立美術館」であると皆一目も二目も置くようになっていっていると思います。

小林 良い事言うじゃない(笑)。

河野 たまには。

(会場拍手)

河合 学芸員達は自分の研究の積み重ねの上に立つて長い間やって来た。どんな展覧会も手抜きはして来なかつたのです。しかし研究する事自体が普通の人には中々解り難いし、成果として華々しく現れるわけはありませんから、「税金で何か学芸員が自分の好きな事をやっている」と言うような底の浅い批判がしかし根強くあるわけです。

そのような成果が花開くには、「桃栗三年柿八年、梨は一八年の馬鹿野郎」なんて言う譬の通り、果物にもそれぞれ実がなるには、時間がかかる。枇杷は九年で生りかねるでしたか。梨と枇杷は千葉の名産です(笑)。それがようやく実を結んで来たのです。これは、この長い時間を辛抱して応援していただいた皆さんのおかげです。ですから、もう一つ今後の美術館というのは、ただ何かを頂戴するという事ではなく、自立する事が大事ですね。一時、美術館は冬の時代で予算も無いし人も来ないし何も出来ないと言つていた。僕は欧米の美術館で少し仕事をした事がありますけれど、欧米の美術館では展覧会をしようとする学芸員が全部お金を自分で集めるんです。ところが日本の美術館は予算が与えられて、予算の範囲内でやればいい。だから人が来ようが来まいがその予算を超えなければかまわないわけだから、僕は「あなた達、好きな事をやっていいんだよ」と学芸員達に言うんですが、しかし、やつぱりそうは簡単には行きませぬ。でも、上からお金がどんどん降つて来るわけではありませんから、今後の美術館は自立して行く、お金も稼ぐし仕事もするというシステムに

ならないと、美術館のような場所はもう頭打ちだと思えます。

それにつけても「お金下さい」は、皆さんから頂かなければならないので、ますます友の会組織やボランティアの方などの御力をも得ながら、口だけ「美術館は市民のため」と言うのでは無く、色んな所で、やっていただけの範囲で御協力頂き、美術館も自立しなければならぬ。僕は『金が無い』と言うんだつたら取って来いよ」と言うんですが、その意味で今後の美術館は、美術館が美術館らしく、自信を持って活動してゆくには、自立しないといけないと考えております。

河野 そうですね。有難うございます。

そろそろ、終了の時間が迫って来ていますけれども、辻さん、ちよつと締め
の纏めをお願いしたいな。

辻 締め役というのは長老がやることになってるんで(笑)。

えー、どうやって締めて良いのか……とにかく河合さんのすごい気合の入った御挨拶を聞きまして、「あ、この人なら大丈夫だ」と。これから美術館はどんどん良くなると思う。それから、全国的に美術ファンと言うのか、鑑賞者の層が私達の頃に比べて何倍にも増えているという事もある。それがまさに千葉市に反映している。千葉市美術館にも漸く……漸く、ではなくて、小林先生の長年の努力があつて日が当たるようになったと言う感じがつくづく致します。

今日は本当に何と言うのか、『なんでも鑑定団』をやっているみたいなの、ものすごい数の方がいらつしやつて(笑)。会場の定員が一、〇〇〇人と聞いて驚いて、私は席が半分埋まつたら良いだろうと思つていたら、それがほぼ埋まつてしまつて居るんですから、もう感激と言うか、河合さんじゃないけれど胸が詰まつて物が言えない(笑)。

いや、どうも有難うございました。

(会場拍手)

河野 御三人の方、それから会場にお越しの皆さん、有難うございました。

時間が余つたならば皆さんから質問をお受けしようかなと思つていたんですけど、今、最高の締めが辻先生からありましたので、千葉市美術館の二〇周年を記念するシンポジウムを閉じたいと思います。

皆様、どうも有難うございました。

(会場拍手)

二〇一五年四月二十五日(土)
於千葉市民会館大ホール

1 注

辻惟雄 小林忠 河合正朝「歴代館長による鼎談「千葉市美術館のコレクション」」『千葉市美術館 所蔵作品一〇〇選』千葉市美術館(編・刊)二〇一五年四月一〇日 一一二―一二八頁

2 「喜多川歌麿展(一九九五年一月三日―二月一〇日)

3 注1. 一三三、一一五、一二二、一二九頁

4 注1. 二六―二七、一一五、一八一―一九、一二九頁

5 注1. 四一、一八、一二〇、一三〇頁

6 注1. 六二―六三、一三二頁

7 「日本の版画Ⅰ 一九〇〇―一九一〇 版のかたち百相」(一九九七年九月九日―一〇月二日)

「日本の版画Ⅱ 一九一―一九二〇 刻まれた「個」の饗宴」(一九九九年九月二日―一〇月二四日)

「日本の版画Ⅲ 一九二―一九三〇 都市と女と光と影と」(二〇〇一年九月一八日―一〇月二日)

「日本の版画Ⅳ 一九三―一九四〇 棟方志功登場」(二〇〇四年八月三十一日―一〇月三日)

「日本の版画Ⅴ 一九四―一九五〇 「日本の版画」とは何か」(二〇〇八年一月二二日―三月二日)

8 「開館一周年記念 珠玉の日本美術 細見コレクションの全貌と、ポストン、クリーブランド、サックラーの話題作」(一九九六年一〇月一日―十一月六日)

渡辺始興《燕子花図屏風》は同展図録一八四―一八五、二二―七頁を参照。

9 辻惟雄「シャーマン・リー氏の思い出―一九九六年の千葉市美術館での講演など―」『國華』

- 第一四四三号特輯 クリーブランド美術館の日本絵画(二〇一六年一月 二九—三二頁
小林忠「渡辺始興筆 燕子花図屏風」同 図版九 五五—五六頁
10 『Tranquility—静謐』(一九九六年一月四日—二月五日)
杉本博司の出品作「海景」シリーズは同展図録(千葉市美術館編 一九九六年)『Hiroshi
Sugimoto』および『Tranquility』(各分冊)を参照。
11 「東山魁夷展」(一九九八年七月—八月二日)
12 同展図録(富山県立近代美術館 千葉市美術館 長野県信濃美術館 日本経済新聞社編
一九九八年)に掲載された佐々木徹「東山魁夷の歩んだ道」一一—一五頁、辻惟雄「心の
風景画家—東山魁夷と広重」一七—二一頁および五〇—五一、一七一、一五四頁参照。
13 注13 佐々木、辻および六一、一一八—一九、一五四頁参照。
14 注13 五八—六〇、一一八—一九、一五四頁参照。
15 辻惟雄「奇想の発見 ある美術史家の回想」新潮社 二〇一四年六月三〇日(初出『芸術
新潮』二〇一二年七月—二〇一四年一月)
16 大英博物館では一九九五年八月三十一日—九月二日に開催された。
17 その後「春画展」は永青文庫で開催された(二〇一五年九月—一九九一年—二月三日)。
18 「青春の浮世絵師 鈴木春信—江戸のカラリスト登場」(二〇〇二年九月—二〇〇二年九月二
〇日)
19 「浦上玉堂」(二〇〇六年—二月三日—二月三日)
20 川端康成旧蔵の《東雲飾雪図》はその後、「大和し美し 川端康成と安田鞆彦」(二〇〇九
年四月四日—五月一日)でも展示された。
21 「田中一村 新たなる全貌」(二〇一〇年八月二日—九月二六日)
22 「生誕一三〇年 橋口五葉展」(二〇一一年六月一日—七月三十一日)
23 河野元昭「中林竹洞筆 山水図襖『國華』第二二七九号」二〇〇二年五月 [二四]—二
九、「三五」頁および注1 四二—四三、一一五、一一八、一三〇頁
24 浦上玉堂《雨褪臙脂図》を指す。注1 四〇、一一五、一一八、一一九、一三〇頁
25 「春季特別展『バーネット・ニューマン 十字架の道行き』(MHO MUSEUM 二〇一
五年三月—四月—六月七日)
26 「江戸の鬼才 曾我蕭白展」(一九九八年三月二四日—五月五日)
27 舞踏家・大野一雄(一九〇六—二〇一〇)による公演は会期中の四月一七日に開催された。
28 「プラティスラヴァ世界絵本原画展—絵本をめぐる世界の旅」(二〇一五年一月四日—三月一日)
29 注1 四七、一一五、一一八、一一九、一一三〇頁
30 「ラヴィッツ・コレクション 日本の絵本」平木浮世絵美術館・横浜、神奈川 一九九四
年一月—一九九一年—三月三〇日)
31 「仏像半島—房総の美しき仏たち」(二〇一三年四月—六月—六月二六日)
32 「房総の神と仏」(一九九九年一月二日—二月二日)
33 『國華』第二二六五号 二〇〇一年三月
34 巻頭の國華編輯委員会(辻惟雄)による「房総の仏像—特輯に当つて」には、「房総の神と
仏」展が戦後の文化財調査の成果を踏まえ、「……房総の宗教美術の遺産を、埴輪から浮世
絵師の絵馬にいたるまで初めて総合的に展示したもので、集められた遺品の多様さや、と
くに仏像にすぐれたものが多いことが関係者の注目を浴びた」とし、特輯号を編む意義が
記されている。また文末には、「本誌での仏像の紹介は、これまで奈良、京都に所在する中
央作に重点を置いてきたが、この特輯を契機にして、今後は関東の他の地域、さらには全
國の各地域に視野を広げ、それぞれの特輯号を続刊して行く予定である」とある。
35 「須田悦弘—須田悦弘による江戸の美」(二〇一二年一月—三月三十一日)
36 「尾形光琳三〇〇年忌記念特別展『燕子花と紅白梅』 光琳アート—光琳と現代美術」
(MOA美術館 二〇一五年二月四日—三月三日)
37 ここで言及されている須田の《梅》(二〇一四)はその後、千葉市美術館で開催された開館
二〇周年記念展「杉本博司 趣味と芸術—味占卿/今昔二部作」(二〇一五年一月—二月二八
日—二月三十一日)で杉本の《月下紅白梅図》(二〇一四)と共に展示された(杉本の作品も
MOA美術館の展覧会に出品されている)。
38 「生誕二五〇年記念展 酒井抱一と江戸琳派の全貌」(二〇一二年一月—二月一
三日)
39 「創立百年記念特別展 琳派(東京国立博物館 一九七二年一月—二月三日)
小林忠「特集・琳派」 俵屋宗理について」MUSEUM 第二六〇号 一九七二年一
月 [一]、四—二頁
40 同論文では冒頭、江戸琳派の成立を、「……化政期に至ってようやく訪れた江戸文化の成熟
は、宗達に始まり芦舟、始興など光琳一派の輩におよぶ京琳派とは別の、独自の風韻を保
つ江戸琳派を生み出すことになった(四頁)としている。その先駆となった初代俵屋宗
理が活動した背景については、「宗理が琳派画風を唱導して一家の風を形成していった時期
が、十八世紀の後半に入った明和、安永期であったことは、興味深い。一般的に江戸文化
が上方文化への追従から脱して自立の機運を萌すが、まさにこの時期に当たっているから
である。絵画界における京都画壇からの離脱は、主として文学性を抑制した合理的視覚の
獲得という観点に発するものであった(一一頁)とし、彼が果たした役割について、「……
なによりも、江戸における宗達光琳派への世人の関心を持続させた功績にあった。それ
は、近世初頭より京都に根ざし発達した琳派という装飾絵画の流派が、その地においては
広範な絵画活動一般の内に拡散して吸収され、むしろ異郷の地ともいうべき江戸に蘇活す
る不思議の土壤を準備するという、宗理自身にとっても思いがけない役割であった。やが
て酒井抱一という生来文人士大夫の風格を備えた偉大な個性が現れ、宗理が可能性をのぞ
かせながらついに果し得なかつた江戸琳派の本格的な開花をもたらすことになる。それ
は、宗理の歿して三、四十年のちのことであった(二二頁)と記し、論文の締めくくりと
している。
41 「赤瀬川原平の芸術原論展—一九六〇年代から現在まで」(二〇一四年一月—二月二八日—二
月三十一日)
42 赤瀬川原平は千葉市美術館での展覧会直前、一〇月二六日に亡くなった。
43 「光琳を慕う 中村芳中」(二〇一四年四月八日—五月一日)

Tales from the Museum of Art Directors, Past and Present

Chair: Kōno Motoaki

Panelists: Tsuji Nobuo / Kobayashi Tadashi / Kawai Masatomo

Introductory greeting: Kumagai Toshihito (Mayor of Chiba)

2015 marked 20 years since the opening of Chiba City Museum of Art. In celebration of this event, Chiba City Museum of Art has published *100 Selected Works from the Chiba City Museum of Art Collection*, a selection made by the three Directors past and present: Tsuji Nobuo, Kobayashi Tadashi and Kawai Masatomo. It has also held an exhibition based on its collection: “An Exhibition of Important Works Selected by the Directors Past and Present” (duration: April 10–May 10; May 19–June 28, 2015). The Directors at the Chiba City Museum of Art have all been scholars specializing in the history of art who have brought their expertise to bear in the purchase of artwork and the hosting of exhibitions.

A Symposium, with a panel of past and present Directors of the museum of art, was held on April 24 to coincide with the exhibition, and took place in the Large Hall at Chiba City Civic Hall. The role of Chair was performed by Kōno Motoaki, fellow history of art scholar and acquaintance of all three panelists. The Symposium began with a greeting from Mayor of Chiba, Kumagai Toshihito.

The past and present Directors spoke of memories of acquiring artwork, of difficult episodes, of reminiscences on the “Kitagawa Utamaro Exhibition” held at the time of the museum opening in 1995 and on the many other exhibitions built on international viewpoints and cooperation that followed, and of future plans for the museum. At Chiba City Museum of Art, acquisition of works of art that were to form the framework of the museum began in earnest in 1990. Acquisition policy focused on Pre-modern to Modern-period Japanese paintings and prints, contemporary artworks and those produced since World War II, and artworks connected to the region of Bōsō where Chiba City and the museum now stand. This exhibition too is in keeping with the original acquisition policy.

Fundamental to the museum of art has been the engagement between two elements: academic research and business, without which its activities would never have come to fruition. The Symposium came to a close with a reiteration of this important fact.

(Translated by Barbara Cross)

『桃源詩画』について―画僧・月僊の桃源郷

松岡まり江

はじめに

月僊玄瑞(一七四一―一八〇九)は十八世紀の京坂・伊勢で活躍した浄土宗の画僧である。名古屋の商家に生まれた月僊は十代で江戸・増上寺に入り修行を積み、傍ら雪舟流の絵師・桜井雪館に絵を学んだ。のち京都に移って知恩院の役僧となり、画は与謝蕪村に私淑、円山応挙に師事したと伝わる。安永四年(二七七五)に伊勢・古市の寂照寺の住持となつてからも、伊勢と京坂を行き来して文化人たちと幅広く交流をもち、画僧として知られていた。現存作品、同時代文献など検討材料に恵まれながらも、その経歴には未だ明らかでない部分が多く、興味がもたれる人物である。本稿では月僊の版画作品『桃源詩画』を中心に、交友の一端、作品の成立背景などを考察してみたい。

一、『桃源詩画』の概要

『桃源詩画』【図一】は黒い地に描線を白く抜くように表した木版の作品である。三m超の画面のほとんどは月僊の画で、上部には五人の人物による詩が添えられているⁱ。題字は伊勢松阪出身の書家・篆刻家である韓天寿(一七二七―一九五)によるものでⁱⁱ、月僊の自跋で結ばれており、管見の限りでは三重県立図書館・神宮徴古館・神戸市立博物館池長孟コレクション(以下県立図書館本、神宮本、神戸本と呼ぶ)に所蔵されている。寸法と画面の形式から、当初より卷子装を前提として制作されたと推察されⁱⁱⁱ、神戸本・神宮本は卷子装、県立

図書館本は折本である。題簽や紙継などから、県立図書館本は近代になって現在の表装に改められた可能性が高い。

本作は、陶淵明の「桃花源記并詩」をモチーフにとっている。この詩文は脱俗の詩人・淵明に憧れた近世後期の文人たちによつて盛んに絵画化されており^{iv}、本作については、次に示す跋文からおおよその制作経緯を読み取ることができる。

桃花春水武陵溪 花盡水窮路欲迷
巷口雲深閭吠狗 村邊樹密叢鳴雞
避秦遙遁人間世 入晋初知洞裏栖
只尺何立興塵隔 遂壺日月境應齋

余偶在草堂作此圖示荒木田董卿田公貞

龍松桓卿度會士寧大家子躍等諸君

諸君披之踴躍風流以題桃花源圖之

五字各韻各賦一律題其上於是余無

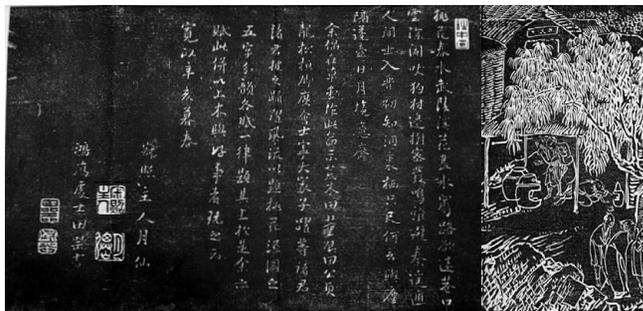
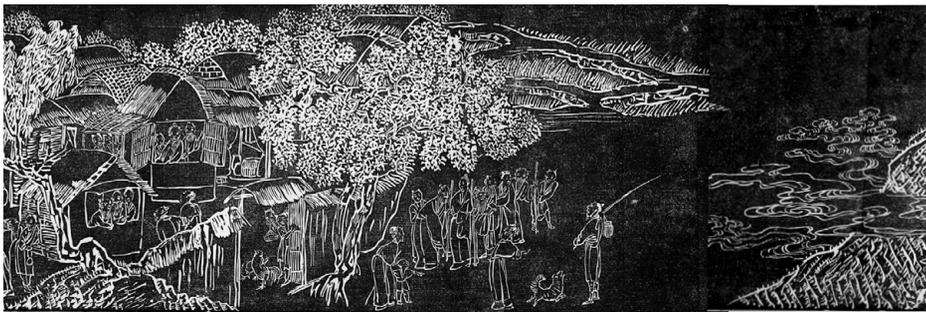
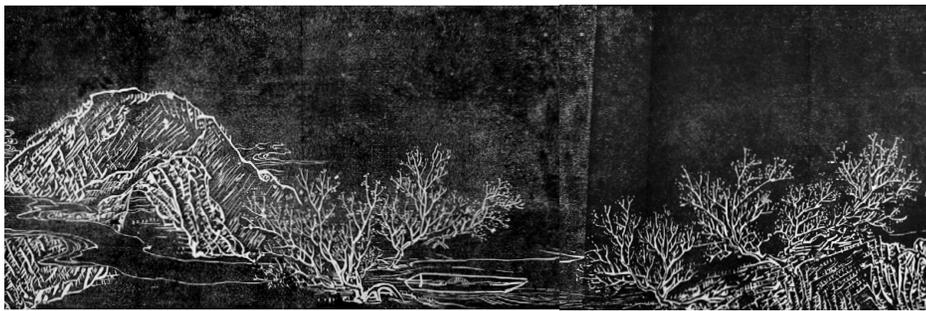
賦此併以上木興好事者玩之云

寬政辛亥暮春

寂照主人月仙 「寂照主人」(方印)「月僊」(方印)

鴻鴈處士田器書 「田器」(方印)「田器」(方印)

【图二】月憺《桃源詩画》（三重県立図書館蔵）

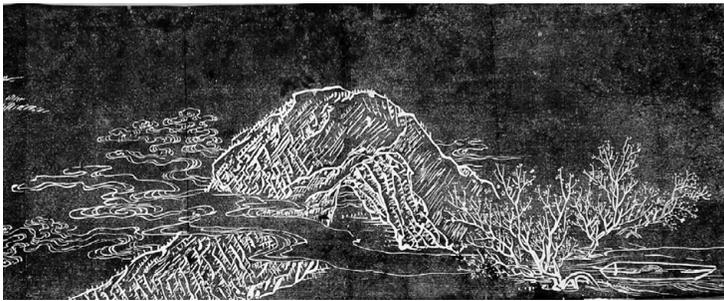


月僊が「此圖」、すなわち版画の原図となった肉筆画を描いたところ、荒木田董卿、田公貞、龍松桓卿、度會士寧、大家子躍らは大いに喜び、「桃花源之圖」と名付け、「題」「桃」「花」「源」「圖」一字ずつを用いて詩を詠み添えた。そして月僊がこれを「上木」、すなわち版画にして好事の者のなぐさみに供した、という。款記から、寛政三年（一七九一）の三月、月僊が教えて五十一歳の作であると分かる。また「鴻鴈處士田器書」の落款が月僊の左に添えられることから、版刻するにあたり田器、すなわち田必器（蔣田暢齋、一七三八—一八〇一）が文字部分の書を手掛けたとみられる【図二】。必器は題字を手掛けた韓天寿の弟子で、寂照寺のある伊勢山田の人。俗称は喜兵衛、鴻鴈堂・彪山と号した。韓天寿や澤田東江に学び、書家として知られた人物で、享和三年（一八〇三）刊の滝沢馬琴『羈旅漫録』では本居宣長・天寿・月僊に並ぶ伊勢の大家として紹介されている。諸葛監に画を学ぶと伝わるほか、月僊に書を教え、また逆に月僊から画を学んだとする文献もある^v。

県立図書館本・神宮本は韓天寿の題字「桃源詩畫」にはじまる。画は桃の花の咲き乱れる溪流の景が冒頭よりしばらく続き、その上



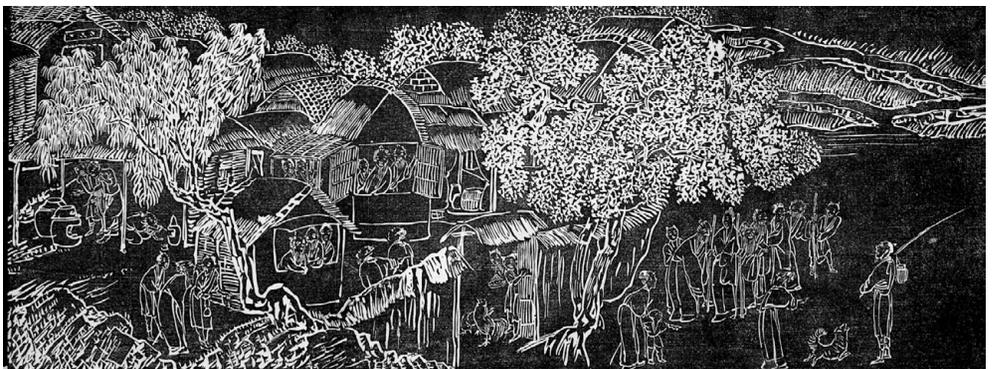
【図二】『桃源詩画』跋部分 落款印章



【図三】『桃源詩画』桃源郷の入口

部に田公貞、度會士寧、龍松桓卿、大家子躍、荒木田董卿の順に賛が賦される。うねる川の流れに沿って詩文が賦される画面は、蘭亭曲水の宴を思い起こさせるが、本作では大半の情景が無人で、人の姿は描かれない。

そして、五人の賛詩が途切れたあたりで流れは穏やかになり、誰かが岸に繋いだらしい一艘の小舟の姿、続いてアーチ状の岩が現れる【図三】。このような岩は月僊の別の肉筆画「桃源図」（一幅、個人蔵）にも描かれている^{vi}。淵明の「桃花源記」では水源に至った漁夫が山に開いた「小口」に入るの^{vii}で、アーチ状の岩は吹抜屋台のような視点で洞穴の入口を示しているのだろう。岩の周りを漂う曲線的な雲が、仙境に近いことを髣髴とさせる。この後、場面は大きく転換し、「桃花源記」に「豁然として開朗なり」とあるように、突如桃源郷の村の様子が眼前に開ける【図四】。釣り竿を手にした漁夫が、村の入り口に至る場面で、珍しい客人の訪れを老人達や子供が出迎える。本作に描かれる仙境は茅葺きのご



【図四】『桃源詩画』桃源郷

く簡素な家が立ち並ぶ村としてあらわされ、住人たちの無邪気で穏やかな表情は、村の平和と豊かさをよく伝えてくれる。

二、木版正面摺の先行先品と月僊『桃源詩画』

本作を印象深いものに行っているのは、「拓版画」、或は「正面摺」と呼ばれる技法の作り出すモノトーンの画面である^{vii}。伊藤若冲『乘興舟』に代表されるこの種の版画については先行研究も多く、中国趣味の横溢を背景に一八世紀にしばしば制作されたことが明らかになっている^{viii}。その嚆矢として知られるのが、浄土宗の僧・忍海(一六九六—一七六一)が汪之元『天下有山堂画芸』の一部を模刻した『有山堂画譜』【図五】である。忍海の画業については近年杉本欣久氏の論考が出されたが^{ix}、本稿で注目したいのは忍海が増上寺屈指の学僧であり、能書家、篆刻家、さらに画僧として知られる人物であったこと、そして『有山堂画譜』が当初、私家版として出版された延享期には月僊は未だ幼少であったが、忍海の一週忌を機に同書が重版された宝暦十二年(一七六二)には、増上寺子院の妙定院で修行中であつたことだ。龍草廬『草廬集四編』巻六(安永六年〔一七七七〕跋)所載の「遥聞転倫無礙和尚寂寄贈義龍月仙二師」は、「無礙和尚すなわち忍海の間に示寂を耳にした龍草廬が月僊と義龍なる僧侶に贈つたもので、間接的に月僊と忍海の間に交流があつたことを示している^x。若き日の月僊はその学びの途上において既に正面摺に接していた可能性は高い。



【図五】忍海『有山堂画譜』(千葉市美術館 ラヴィッツ・コレクション)

また、『乘興舟』『文圃瑤華』『素絢石冊』など若冲の下絵による木版正面摺の制作に深く関わつた相国寺の僧、大典顕常(一七一九—一八〇二)とも親しい間柄にあつたことが指摘されている。月僊が江戸で画を学んだ師、桜井雪館の墓碑銘が大典の撰によることから、師匠経由でその交流が始まったと推察されているが^{xi}、一連の木版正面摺は明和四—五年(一七六七—六八)頃、月僊が二十二—三歳頃に制作され、その数年後に月僊は江戸から京へと居を移している^{xii}。恐らく京都に来てすぐ、大典のもとで正面摺の諸作品を目にする機会を得ていただろう。

大典と月僊については既に高橋博巳氏の論考に詳しいが^{xiii}、主な事項と共に整理のために左に示す。

明和七—八年(一七七〇—七二)頃 この頃月僊京都に移住するか。

大典、月僊を京都・小松谷に訪ねる。(大典『小雲樓稿』巻

三)

安永三年(一七七四) 月僊、伊勢・寂照寺の任職になる。

安永四年 春 大典、江戸で偶然月僊に出会う。(大典『北禪詩草』巻

二)

安永五年頃 大典、寂照寺を訪れる。(大典『北禪詩草』巻一、十六—十

七)

安永七年 大典、寂照寺を訪れる。(北禪詩草』巻一、二十二)

安永八年 大典、京都・相国寺慈雲院の任職となる。

安永九年 月僊『列仙図贊』刊、大典は同書に序文を寄せる。

天明二年(一七八二) 大典、月僊と墨梅について語らう夢を見る。(北禪詩草』

巻三)

天明六—七年頃か 月僊が大典を訪れ、蘭亭曲水の屏風を描く。(北禪詩草』

寂照寺に栖神堂雲嶂楼を建立。(大典『北禪文章』卷二)

寛政四年(一七九二) 焼失した相国寺慈雲院の観音堂が再興され、月僊の描いた龍の図が仰板に貼られる。(大典『北禪遺草』卷二)

寛政八年 八月 大典、月僊の「近江八景」に序を付ける。(『北禪遺草』卷四)

九月 大典、月僊の「百翁図」に跋を付ける。(『北禪遺草』卷七)

寛政九年 寂照寺伽藍再建。

寛政十年 四月 大典、月僊の「仙境図」に跋を付ける。(『北禪遺草』卷七)

寛政十二―享和三年(一八〇〇―一八〇三)秋 寂照寺経堂を建立。享和元年に大典没。

二十以上年の離れた月僊と大典は、このように長年にわたって親しく交際していた。右に示したうち、天明二年の項目は、夢に現れた月僊と梅図について語らった経験を題材に、大典本人が詠んだ詩から知られるのだが、のちに、実際に月僊の描いた梅の画を得て喜んだ大典が五山の諸老に賛を求めたことが、詩僧として知られる六如慈周(一七三四―一八〇二)の詩により明らかにされている。また屏風の揮毫を依頼し、月僊が大典の目の前で蘭亭曲水図を描いたこともあったようだ。出来上がった画に賛を寄せるのみではなく、自らのための制作を求め、住持を務める相国寺・慈雲院の観音堂に「龍図」を飾ったことは、大典が画人としての月僊を高く評価していたことを示す。年下の友の才能を愛した大典は、月僊の伊勢・京都での活躍を喜び、後押ししていたに違いない。

さて、『有山堂画譜』や若冲・大典周辺の正面摺の版画と出会ったのちに、伊勢に下った月僊が目にした正面摺による作品として、本作の題字を手掛けた韓天寿が私財を投じて制作した現松阪市・継松寺の『岡寺版法帖』を挙げることができる。計三十七帖にも及ぶこの法帖は安永九年(一七八〇)頃に親集帖十帖が成り、天寿の死後も継松寺住職・無倪により制作が続けられて寛政十年(一七九八)に子集帖十帖が刊行され、法帖は今も版木と共に同寺に伝わる。

三村竹清によれば、天寿は江戸の書に「石摺の世話役」と謳われ、中国から輸入された希少な法帖を摹すことに長けていたという。村田春海『織錦舎隨筆』中には天寿が数年の工夫の後に見出した方法として、その制作の一端が紹介されている^{xiv}。具体的には、板に少し油をひき、ぬらした紙を板に貼り、ふりもしくは膠をひいた上で、硬めの刷毛で叩いて紙を板に密着させる。そして生乾きの段階でたんぽを用いて墨をつけていく、という手順が示されるほか、たんぽについては木板・綿を油紙で包んだものを粗目の、しかし目の揃った木綿を使い包むこと、仕上げにきれいに包んだ蠟で一通り紙の上をなでること等が記されている。月僊の『桃源詩画』が版画として成った寛政三年は天寿の晩年にあたるが、伊勢から遠からぬ松阪の地で進んでいた彼のライフワークを、月僊が知らずにいたとは思われない。

『桃源詩画』についても、墨つけのむらが残っていることからたんぽを使ったと見てよい。摺りは『乗輿舟』に艶のある墨の美しさでは劣るが、正面摺に独特の凹凸が描線を引き立て、版画作品としての完成度を高めている^{xv}。現在確認される数が前述の三点のみであることから、周囲の好事家達に供するためのプライベートな制作であったと考えられるものの、桃源詩画を版画として制作するにあたり、なぜ非常に手間のかかる正面摺を選んだのだろうか。理由として、先に述べたような凹凸による表現効果のほか、中国伝来の技法である正面摺がまとう彼の国の趣を添えること、着色画であったもの肉筆画卷を

漆黒の画面にうつすことで、桃の咲く溪流に奥行きを加え、桃源郷にふさわしい非現実的な世界を演出する目的があったと考えられる。

しかし先に述べたように月僊周辺で制作された正面摺の作品を辿ってみると、彼にとってその静謐な画面は、若き日に接した増上寺の忍海、相国寺の大典、二人の優れた学僧の面影を想起させるものであったように思われる。そして題字を寄せた天寿の法帖出版も制作の契機、或は技法的な面での助言をも与えていたのではなからうか。中国趣味の流行と、文化人同士の交流とがともに作用して制作されたと思しい『桃源詩画』は、月僊とその周囲に広がっていた画壇・文壇の豊穡を、私達に伝えてくれる。

三、月僊の桃源郷―陶淵明の詩文と『桃源詩画』、呉春「武陵桃源図」

月僊は円山応挙（一七三三―一七九五）の門下に名が挙がるが、その師事がどのようなかであったのかは定かではない。しかし作品をみれば、淡白な色使いや樹木・岩など描法の多くに応挙の影響が大きいことは首肯されるだろう。月僊は応挙のバトロンであった妙法院真仁法親王（一七六八―一八〇五）のもとに出入りしていたことが法親王の日記から知られており、寛政八年の作である「群仙図」などの障壁画が同じ応挙門下であった呉春（一七五二―一八一二）の「山水図」とともに妙法院白書院に伝えられている^{xvi}。また、法親王に侍読として仕えた村瀬栲亭の詩文集には、法親王の命によって栲亭が月僊の画に寄せた詩や、応挙と月僊の合作がみえ^{xvii}、六如の著にも法親王の命で応挙・呉春・月僊の画にたびたび詠じた詩が載っていることから、同じ時期に法親王の仕事も多く手掛けていたことが窺える^{xviii}。また呉春は応挙に師事する以前は与謝蕪村の門下であり、蕪村に私淑していた月僊とは共通項の多い画家である。

呉春にも桃源郷を描いた画巻がある。試みに月僊の『桃源詩画』と、呉春「武陵桃源図」（二巻、遠山記念館蔵、重要美術品、【図六一―一】〜【三】）とを比較す



【図六一―一】呉春「武陵桃源図」
（遠山記念館蔵）部分



【図六一―二】同図部分、桃源郷

ると、似通う点を複数見出すことができる。まず、序盤に桃の花が両岸に咲く無人の溪流を描き、その先の水源に乗り捨てられた小舟、そして桃源郷に出迎えられる漁夫の姿を描くという構成は原文に沿った自然な展開ながらよく共通し、溪流の描写や岸に繋がれた小舟、村の入り口で漁夫に吠えかかる子犬、平和を象徴するつがいの鶏の姿、茅葺と瓦の入り混じった小屋のかたちなども親しい趣をもつ。桃源郷を描く画卷については、中国画に趙伯駒様式と伝わる叙事的な作例が存在しており、日本においても画壇・詩壇における桃源郷憧憬の高まりを背景に、江戸中期以降盛んに描かれたと指摘される^{xx}。谷文晁(一七六三—一八四〇)にもその様式に従った画卷の作例があることが知られるが^{xx}、呉春・月僊の二人にもこの系統の舶載画卷、もしくは版本など共通のイメージゾーンの存在を想定できるだろう。

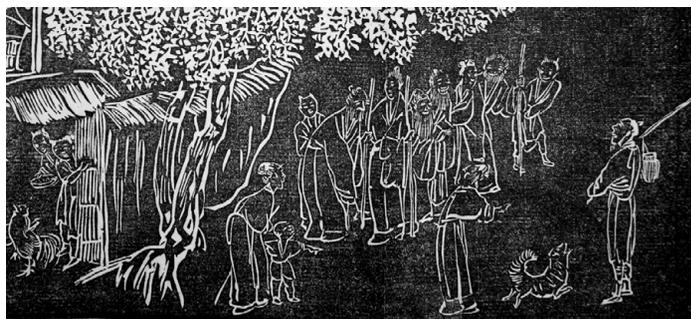
しかし改めて二つの作品の図様を陶淵明の「桃花源記並詩」と対照させていくと、呉春の桃源図は「桃花源記」の中の語句を丁寧^{xx}に拾い、説明的に画面をつくっていることに気付く。「土地は平曠にして屋社儼然たり」とあるように、水源の先の村はゆったりと広がりのある空間の中にあり、清らかに水をたたえる池や田、農村の営みに欠かせない植物であった桑や竹も「良田、美池、桑や竹の属あり」の語通りに描きこまれる。対して月僊の画は、全体の三分の二を巻頭から続く無人の溪流の描写が占めるのだが、画部分の末尾六〇cmほどに桃源郷の村部分—家・人・木々といったモチーフが多く詰め込まれているために一気に賑々しい印象に転じ、緩急の差が激しい。村に多く見えるにこやかな老人と子供たちは「桃花源記」に「黄なる髪せるも髻を垂れたるも、並に恰然と

【図六一三】同図部分、漁夫と村の人々



して自ら楽しめり」また「詩」に「童孺欲しままに行くゆく歌い 斑白飲みみつつ遊び語る」とあるように、人々の質素ながら穏やかな有り様を示しているだろう【図七一—一三】。月僊の力点は、見知らぬ来訪者を好奇心にあふれたまなざしで迎える人、集まって語らう村人達の活気を描くことにある。他方、呉春の描く桃源郷の人々は、ゆったりと端正で品格のある姿をとっており、両者から受ける印象には隔たりがある。月僊の画風は田能村竹田に『山中

【図七一—一】月僊『桃源詩画』部分 漁夫と村の人々



【図七一—二】同図部分、村人



【図七一—三】同図部分、村人



人饒舌』で「瘦筆乾擦」「人物簡にして疎朗」と評されて以来、粗放で野卑なイメージが特にその人物画につきまとうが、必要に応じて端正な画を描く技量を備えていたことは、天明二年（一七八二）に現岡崎市・隨念寺を訪れた際に描いたという「倫誉上人像」のような丁寧な仕上げの作品から確認できる^{xxi}。版画になることを前提として、版下絵を幾分簡略なものにした可能性を差し引いて考えても、なお感じられるこの差異は何に起因するのだろうか。

月僊が詩文の内容に不案内であったことが原因とは思われない。すでに指摘があるように『列仙図賛』に寄せた大典の序には「月仙上人、修道の暇、絵事を好み、興到るときは山水草木、人と物と皆な一毛端に之れを発す。又た詩をなる所は以て諸れを色に発し遺すこと無きなり。故に上人の画は其れ諸れ人の画に異なり。問者、列仙の伝を読み、其の故図を換へ、出すに新意を以てし、一一其の状態を描し、且つ冠するに短言を以てす。亦た修道の遊戯と云ふ」とある^{xxii}。大典によれば詩を好んだ月僊は、詩意を余すことなく絵にすることができた。故に、その画は他の絵師の作品とは異なっていた、という。同様の言は柴野栗山や皆川淇園といった他の詩人の著作にも載る^{xxiii}。

大典が先の序文で月僊にとつての絵画制作は「修道の暇」「修道の遊戯」あくまで余技としてしているように、月僊の生涯は僧侶として、荒廃していた寂照寺を立て直し、勤めることにその本意があった。奇人ぶりを伝える逸話も多くあるが、画で得た金を蓄財し、廃寺同然であった同寺を二十年の歳月をかけて改修、経堂を新築し、さらにその間飢饉の年には蓄えた資金を崩して貧民に供出したことは、忘れられることなく同地に伝えられる。雅人たちのサークルに親しんだといえども、その矜持は生涯、僧侶のそれであった。最晩年に当たる文化二年（一八〇五）には、千五百両を奉行に預け、その利子は彼の死後も毎年「月僊金」として弱者の救済に当てられている。

伊勢に暮らした日々の中で、月僊にとつての桃源郷は案外、身近な人々の素朴な暮らしの中に見出されていたのではなからうか。呉春の描いた「武陵桃源図」の享受者であっただろう富裕な知識人の理想と、月僊の脳裏に浮かんだそれとの差異は、僧としての半生と照らし合わせていくと、ごく自然なことに思える。本作のように詩文への解釈に彼の体験や感興が相俟って画となつたとき、大典や他の詩人たちの目には好ましい「新意」そして「詩意」をたたえる図として映つたのかもしれない。

おわりに

改めて月僊の生涯を見渡してみると、その交友範囲の広さ、エネルギー豊富な活動に驚かされる。京都・大坂・岡崎は勿論、時期を特定できないものの、京都移住後、幾度か関東に来訪していた形跡がある。しかし翻つて本作に関わつた顔ぶれを見れば、題字の韓天寿、書の田必器はいずれも伊勢の人。賛についても、荒木田重卿は江村北海の門下で学んだ伊勢外宮の禰官、龍松桓卿も必器門下で伊勢の人、度會士寧も伊勢神宮禰官に多い「度會」姓であり、五人全員が寂照寺近辺の好事家達であつたと推測される^{xxiv}。齢五十を過ぎ、高名であつた月僊が望めば京坂に名だたる文人達―それこそ大典による賛を求めるところも可能であつたはずだ。それを敢えて地元ゆかりの人々で揃え、忍海や大典が用いた漆黒の画面を難度の高い正面摺りによつて実現したことに、彼の意図―当地への愛着と誇りを感じ取ることができるように思う。桃源郷を描きながら、村の入り口に立たせた漁夫の姿に、伊勢に赴任した若き日の自分を重ねていたのだろうか。

i 五人の賛詩・落款等は次の通り。

「大観」(長方印)

題桃花源圖 得題字

數里桃紅物外棲 奇雖妙画好同題

烟霞水淺青谿裏 雞犬雲閑丹洞西

漁父意捉談未已 仙翁顏破酒相携

看來恍惚真源路 坐覺林巒使客迷

田光亭「謙堂」(方印)、「田光亭」(方印)

「翽美趨」(長方印)

同前 得桃字

十里紅霞兩岸桃 青谿廻轉水源高

晉時漁客迷津去 秦代遺民卜地逃

數頃田園洞裏關 幾家雞犬雲中號

誰云仙境終難覺 今見新圖入彩毫

度會宋清「度會宋清」(方印)、「字本」(方印)

「浮」趨(長方印)

同前 得花字

一葉輕舟繫水涯 春風吹散滿谿花

雲埋崖谷纜通路 地關川原別作家

那識人間徑漢魏 還憐物外樹桑麻

奇號却入丹青妙 千古颺流堪嘆羌

龍松正厚「龍松正厚」(方印)、「恒卿氏」(方印)

「衆妙」(方印)

同前 得源字

漁艇遠移煙岸昏 桃花盡處是仙源

垂髫嬉戲隨鷄犬 黃髮逢迎具俎尊

塵外由来無紀曆 洞中元自有軋坤

靈區古向人間秘 却見遺躡画裏存

大家麟「家麟之印」(方印)、「子躍」(方印)

「癖」(方印)

同前 得圖字

桃花爛熳幾千株 云是武陵源上圖

林盡洞門通石徑 地開茅屋接雲衢

人々未改秦衣服 戶々何勞晉稅租

奇跡一從漁客洩 塵寰寫得見仙區

荒木田興正「興正之印」(方印)、「董卿」(方印)

ii

神戸本の題字のみ、韓天寿ではなく「田宗孝」なる人物によるが、画部分を他本と比較しても版木の摩耗は認められないことから、県立図書館本・神宮本とそれほど時を隔てない摺りと見てよいだろう。田宗孝は田必器の養父と伝わる人物だが桃源詩画の成った寛政三年当時既に没しており、検討を要する。

iii

三重県立図書館本 天地二四・一×三三五・六cm 韓天寿題、題字部分 幅一・八cm

神宮徴古館本 天地二・三・五×三三二・七cm 韓天寿題、題字部分 幅一・二・一cm

神戸市立博物館本 天地二・三・六×三四五・九cm 田宗孝題、題字部分 幅一七・〇cm

摺や状態は三重県立図書館本が優れているが、大正頃に表装を現在の形式(折本に改められた)と思しい。巻末余白の署名「橋陰迂」と「正稟」の印があることから伊勢外宮の禰官、橋村度會(正稟二八四一—一九一九)の旧蔵品か。

「桃源万歳! 東アジア理想郷の系譜」展図録(岡崎市美術館博物館、二〇一一年)を参照。

田必器については、三村竹清「田必器伝」(『三重県史談会会誌』二巻一号、一九一一年)、同「田必器」(『伝記』四ノ六、一九三七年)、同「伊勢と篆刻家」(『書苑』三ノ八、四ノ十二、一九三九・四十年)を参照。月僊への師事については我妻栄吉「三重県の画人伝」(復刻版、三重県郷土資料刊行会、一九八三年)に言及がある。

前掲「桃源万歳!」展図録所載、なお、曹洞宗の僧、祥水海雲の『金城余稿』巻二(寛政二年(一八〇〇)刊十六ウ)には「子卿宅觀月仙上人画桃源図」が載る。子卿、すなわち関口雪翁は越後魚沼の漢学者。詩からどのような形態の作品であったかは特定しがたいが「尤於山水妙入神」の一文は山水の中に桃源郷を小さく配する「桃源図」のような軸装の作品を思わせる。

子卿宅觀月仙上人画桃源図

夾岸芳林標如霞 溪流泛一带落花

霏紅香翠映明媚 牽輿漁舟遡水涯

嵐氣襲來深莫測 定知此際藏仙家

仙公畫手少比倫 尤於山水妙入神

馳山走海在運掌 恍惚置我武陵濱

畫裡仙源流欲響 圖中靈境不斷春

玄對不覺入仙域 坐臥游目誤是真

笑向漁翁且欲問 胡為重來迷問津

木版正面摺では陰刻の版木の上に紙を密着させ、拓本をとるように墨を紙の上からつけていくため、正確には「摺」とは言えないが、以降便宜的に「正面摺」や「摺り」の語を使用する。

中野三敏「拓版画の系譜」木拓正面版について「『名品でたどる 版と型の日本美術』展図録、町田市立国際版画美術館、一九九七年)。名家の筆跡を収録した法帖が日本でも盛んになり、制作に用いる正面摺が絵画に応用されたことを述べ、宝曆以降の作例が挙げられている。

viii

vi

v

iv

iii

ii

i

0

-1

-2

-3

-4

-5

-6

-7

-8

-9

-10

- ix 杉本欣久「増上寺の学僧・忍海の作画と復古思想―江戸中期の徂徠学派にみる文化潮流」(『黒川古文化研究所紀要 古文化研究』一四号、二〇一五年)なお漢詩文に登場する月僊の事項についての多くは同氏の「江戸中期の漢詩文にみる画人関係資料」(『黒川古文化研究所紀要 古文化研究』九・一〇号、二〇一〇・二〇一一年)による。
- x 義龍は京都・小松谷の正林寺の僧であったと思しい。月僊についても一時正林寺にあったとす。文獻『野村可通』伊勢の古市夜話(三重郷土資料刊行会、一九六七年)がある。
- xi 山口泰弘「月僊の初期作風の多様性と様式形成」(『ひるういんど』三、三重県立美術館、一九九一年)
- xii 大典『小雲樓稿』卷三(寛政八年(二七九六)刊)の「過月仙上人小松谷幽居」の詠じられた時期は、前後の制作年が明らかな詩から、明和五年(二七六八)以降、安永二年(二七七三)の春以前に絞ることができる。大典『北禪詩草』卷一「月仙上人久しく東山に棲み、近頃渡会の寂照寺に住す。乙未の春、余東遊してたまたま会晤を得、賦して贈る」に「久しく」とあることと考え併せれば、月僊が京都に移住した時期は、明和七々八年頃と推される。
- xiii 高橋博巳「詩中の画人―月僊」(『江戸文学』一卷三号、ベリかん社、一九九〇年)。本稿の多くは氏のご論考に依る。
- xiv 三村竹清「醉普斎韓天寿」(『三重県史談会誌』一卷四・五号、一九一〇年)所載。
- xv 裏打ち紙の薄い神宮本、次いで神戸本で凹凸が顕著。逆に当初のものから表装が変わっている県立図書館本では凹凸が伸ばされ、確認が難しい。
- xvi 今中寛司『妙法院真仁親王御直日記』に現れた写生派絵師たち(『文化学年報』二三・二四、同志社大学文化学会、一九七五年)、妙法院史研究会編『妙法院史料第四卷 堯恭法親王 真仁法親王』(吉川弘文館、一九七九年)
- xvii 村瀬栲亭『栲亭三稿』卷三(文政九年(二八二六)刊)に「応挙が青鶴、月僊が古楊を描いた」といふ世継希仙所蔵の「古楊青鶴図」が載る。
- xviii 六如『六如庵詩鈔二編』卷五(寛政九年(二七七七)刊)、同『六如庵詩遺鈔編』(文政六年(二八三三)刊)
- xix 揖斐高「江戸期の桃源詩」(前掲『桃源万歳』展図録)
- xx 大英博物館蔵、谷文晁『Earthly Paradise in Wuling: story of Peach Blossom spring』、(Museum number 1980.0225.0.4)
- xxiii/xxii/xxi 『松平・徳川氏の寺社』展図録(岡崎市美術館、二〇〇四年)
- 『大典』北禪文章』卷一(寛政四年(二七九二)跋)、読み下しは前掲高橋氏論文による。
- 前掲高橋氏論文所載「僧月僊の平賀子英が詩意を画く巻の後に書す」(皆川淇園『木活字本淇園文集前編』文化一三年(二八一六)序)、月僊の「蘭亭図に跋す」(柴野栗山『栗山文集』卷六、天保一三年(一八四二)刊)。
- xxiv 浅野松洞『三重先賢伝』(復刻版、東洋書院、一九八一年)、前掲『三重県の画人伝』を参照した。

〔付記〕本稿は二〇一四年に早稲田大学美術史学会秋季例会にて口頭発表した内容をもとに加筆・修正したものです。発表時、早稲田大学教授・成澤勝嗣先生、同・内田啓一先生に貴重なご意見を賜りました。また作品調査の際には、神戸市立博物館学芸員・石沢俊氏、神宮司廳文化部学芸員・中村潔氏、三重県立図書館の皆様が格別のご高配を賜りました。また月僊作品の基礎的な調査には二〇一三年度、公益財団法人出光文化福祉財団より助成を頂きました。記してここに謝意を表します。

“Tōgen Shiga” by Gessen: Artist-monk Gessen’s Utopia

Matsuoka Marie

Gessen Genzui (1741-1809) was an artist-monk of the Jōdo (Pure Land) Buddhist Sect active around Kyoto, Osaka and Ise in the Late Edo Period. During his teen years he trained at Zōjōji Temple in Edo, while also studying painting under Sakurai Sekkan, artist of the Sesshū style. He later moved to Kyoto where he was greatly influenced by Yosa Buson, and became a pupil of Maruyama Ōkyo. Even after taking up residence in Jakushōji Temple at Furuichi, Ise in 1775, he continued to travel between Ise and Kyoto/Osaka mingling widely with the cultural elite, thus gaining himself the reputation of artist-monk.

“Tōgen Shiga (The Peach Blossom Spring [Utopia]: Illustrated Poems)” is a woodblock print in handscroll format, copies of which are housed in Mie Prefectural Library, Jingū Chōkokan (Ise Shrine History Museum) and Kobe City Museum. Its theme is “The Peach Blossom Spring Story and Poem” by Chinese Six Dynasties’ poet Tao Yuanming. It measures between 23.5 and 24.1 cm in width, and between 332 and 345 cm in length (the different mountings for each copy of the scroll causing this variance in measurement). The opening scene of a mountain stream and flowering peach trees continues for about two thirds of the total illustration, which ends with a depiction of the village of the peach blossom spring (utopia). The scroll finishes with Gessen’s own postscript, sign and seal, and is dated third year of Kansei (1791). Beside Gessen’s sign and seal is that of Ise calligrapher Den Hikki, suggesting that Hikki provided the calligraphy for the writing that was then put into print. This work is unusual in that it has been produced using a similar method to an ink rubbing: paper is placed over incised (white-line) woodblock which is then dampened to allow it to sink into the woodblock and ink is applied. Called “mokuhan shōmen zuri (woodblock front-printing)” or a “taku hanga (ink-rubbed print)”, in this type of print the whiteness of the lines stands out in stark contrast to the jet-black background. Originating in China, “hōjō”, copybooks printed from the works of old masters of calligraphy, were produced using this technique, suggesting that in Edo-period Japan woodblock front-printing was evocative of China. The technique is widely known today through its use in “Jōkyōshū (Impromptu Pleasures Afloat)” by Itō Jakuchū.

Gessen had associations with two famous learned monks who used the woodblock front-printing method in their artwork. One was Ninkai of Zōjōji Temple, Edo, who created “Yūzandō Gafu”, an album of reproduced pictures using front-printing. Gessen met him when he trained at Zōjōji in his teens. The other was Daiten Kenjō with whom Gessen shared an acquaintance of over 20 years following the completion of his Buddhist training in Edo and his move to the Kyoto-Ise area. Daiten assisted in producing Jakuchū’s “Jōkyōshū” and “Genpoyōka” – a collection of plant pictures - and it is likely that, through Daiten, Gessen was able to observe front-printed artworks such as these. Furthermore, the title lettering for “Tōgen Shiga” was written by the calligrapher Kan Tenju; it is known that Tenju was involved in the publication of “hōjō” copybooks which used front-printing.

I suggest, then, that “Tōgen Shiga” came about through influence from these three individuals. Devised and executed following the trend for things Chinese, and as a result of exchange with the cultural elite, “Tōgen Shiga” is an important object expressing cultural conditions of the time during the 18th century. The scroll includes poems of appreciation by five other individuals, all of whom are from Ise. We can assume Gessen felt a special attachment to Ise where he lived when producing this work.

Also, a comparison with the hand-painted work by Goshun produced during the same period, “Buryō Tōgen Zukan (The Peach Blossom Spring of Wuling: Illustrated Scroll)” (Tōyama Memorial Museum) shows the utopia depicted in “Tōgen Shiga” to be simple, and the people, at ease and congenial with one another. Gessen was highly acclaimed not only as an artist, but also as a Buddhist monk, devoting his life to philanthropy, in particular the salvation of the poor. With a profound knowledge of Chinese poetry, Gessen undoubtedly had a good understanding of Tao Yuanming’s poem; nevertheless, he portrays utopia in such a way. This is a symbol of how he carried out the work of artist as one at home among the literati, yet ultimately living life as a monk.

(Translated by Barbara Cross)

平成二六(二〇一四)年度 千葉市美術館の活動

一 展覧会

(一) 企画展 (八件)

① 四月八日(火)～五月二一日(日) 七・八階展示室

「光琳を慕う 中村芳中」

*江戸時代後期に大坂を中心に活動した画家中村芳中(？)一八一九の画業を紹介する展覧会。芳中は南画風の山水や指頭画を描いた後、尾形光琳の画風に傾倒し、たらし込みを駆使した琳派風の作品を描くようになった。尾形光琳から中村芳中に至る琳派の画家、当時の大坂画壇の作品も併せて展示。

(三二日間/入場者一三、二七四人)



チラシ



「光琳を慕う 中村芳中」 展会場

② 五月二〇日(火)～六月二九日(日) 八階展示室

「島根県立石見美術館所蔵 水彩画家・大下藤次郎」

*日本における水彩画のパイオニアであり、日本の伝統的な風景観を変革した大下藤次郎(一八七〇～一九一一)の回顧展。本展覧会は大下の作品収集で全国的に知られる島根県立石見美術館の所蔵作品により、明治時代に新しい風景画を創出した大下の画業と、彼が普及に努めた水彩画の魅力を紹介。

(四〇日間/入場者二二、四九九人)



チラシ



「水彩画家・大下藤次郎」 展会場

③ 六月二七日(火)～二九日(日) 九階市民ギャラリー

「千葉市美術協会特別展 『秀作二〇一四』」

(一三日間/入場者一、二二〇人)

④七月八日(火)～八月三日(日) 七・八階展示室

「夏休み特別企画 江戸へようこそ! 浮世絵に描かれた子どもたち」

*幕末・明治に来朝した外国人の多くが、日本の子どもが非常に大切にされ、幸福そうにしていることを印象深く書き残している。江戸時代には、母子の情愛、子どもの遊びなど、子どもを主題とした浮世絵も多く制作された。約三〇年をかけて収集された公文教育研究会の子ども浮世絵コレクションから約三〇〇点を展示。

(五四日間／一〇、九三四人)



チラシ



「江戸へようこそ! 浮世絵に描かれた子どもたち」展会場

⑤九月九日(火)～一〇月一九日(日) 七階展示室
「簗木清方と江戸の風情」

*近代を代表する日本画家・簗木清方(一八七八～一九七二)は、幼時に親しんだ江戸の風情を終生愛し、描き続けた。本展は鎌倉市簗木清方記念美術館の協力を得、本画の代表作や素描、挿絵、版画作品約一二〇点を集め、当館所蔵品より関連する江戸・明治の作品をあわせて展観。

(四〇日間／入場者一三、五二五人)



チラシ



「赤瀬川原平の芸術原論展」会場

⑥一〇月二八日(火)～十一月三日(火・祝) 七・八階展示室

「赤瀬川原平の芸術原論展 一九六〇年代から現在まで」

*一九六〇年代、めまぐるしく変転する前衛芸術の最前線を駆け抜けた赤瀬川原平(一九三七～二〇一四)。本展では六〇年代の活動を中心に、五〇年を超えるアーティストの歩みを回顧。七〇年代以降の漫画家、写真家、小説家としての活動を含め、幅広い活動を紹介(赤瀬川原平氏は一〇月二六日歿)。

(五五日間／入場者一八、二二七人)



チラシ



「簗木清方と江戸の風情」展会場

⑦二〇一五年一月四日(日)～三月一日(日) 八階展示室

「ブラティスラヴァ世界絵本原画展―絵本をめぐる世界の旅―」

*スロヴァキア共和国の首都ブラティスラヴァで隔年に開催される絵本原画のコンペティションから、第二四回展(二〇一三年九月)の授賞作品及び日本からの参加作品を中心に展覧会を構成。また、特別展示として四九カ国に上る参加国の中からユニークな作品を取り上げ、地域ごとの絵本事情などと併せて紹介。

(五五日間/入場者九、四一五人)



チラシ



「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」
展会場

(二) 所蔵品を中心としたテーマ展 (五件)

①四月八日(火)～五月一日(日) 七階展示室

「春爛漫―千葉市美術館所蔵版画一〇〇選」

*千葉市美術館が所蔵する浮世絵および近代版画のコレクションから、優品を紹介。

(三二日間/入場者一二、七四二人)



「春爛漫―千葉市美術館所蔵版画一〇〇選」
展会場

⑧三月七日(土)～二七日(金) 七・八階展示室、九階市民ギャラリー、

一一階講堂

「第四六回千葉市民美術展覧会」

*第四四回千葉市民芸術祭の一環として、千葉市美術協会会員及び公募入選作品約千点を七部門に分けて展示。

(二二日間/入場者一五、八六〇人)

②五月二〇日(火)～六月二九日(日) 七階展示室

「特別展示・千葉県立美術館所蔵 近代日本の水彩画/千葉市美術館所蔵 無

縁寺心澄・石井光楓」

*「水彩画家・大下藤次郎」にちなみ、千葉市美術館所蔵品に千葉県立美術館の所蔵品を加え、「大下以前・以後」の水彩画を紹介。

(四〇日間/入場者一一、三九七人)



「近代日本の水彩画」 展会場



「無縁寺心澄・石井光楓」 展会場



「新収蔵作品展 七つ星―近年の収蔵作家たち」 展会場

③七月八日(火)～八月三日(日) 七階展示室
「スモールワールド」

*「浮世絵に描かれた子どもたち」と連動し、子供や小動物、小さなものに寄せる愛着が表された作品を展示。

(五四日間／入場者一〇、八五八人)



「スモールワールド」 展会場

④九月九日(火)～一〇月一九日(日)

「新収蔵作品展 七つ星―近年の収蔵作家たち」 八階展示室

*近年収集した作品を中心に、所蔵品を紹介。

(四〇日間／入場者一〇、一七一人)

⑤二〇一五年一月四日(日)～三月一日(日) 七階展示室
「机のうえの旅―楽しい現代美術」

*「プラティスラヴァ世界絵本原画展」のテーマに合わせて、現代美術に初めて触れる人に親しめるよう構成。

(五五日間／入場者七、一七〇人)

二 展覧会関連講演会およびイベント等(二三件)

〈光琳を慕う 中村芳中〉

①四月二日(土) 一一階講堂 (参加者一三三人)

講演会「光琳追慕の系譜―光琳の江戸下りから抱―をつなぐ―」

講師 玉蟲敏子(武蔵野美術大学教授)

②五月一〇日(土) 一一階講堂 (参加者一三三人)

落語会「抜け雀」

出演 三遊亭良楽(落語家)

〈水彩画家・大下藤次郎〉

③五月三二日(土) 一階講堂 (参加者一三五人)

講演会「かいて、つながる―表現者、大下藤次郎の魅力―」

講師 川西由里(島根県立石見美術館主任学芸員)

④六月一四日(土) 一階講堂 (参加者一〇四人)

講演会「趣味と実利と水彩画」

講師 原田光(岩手県立美術館館長)

⑤六月一七日(火)～二二日(日) 一階プロジェクトルーム

関連企画 「私が見つけた風景」展

*公募(市内在住もしくは通学小学校四～六年生及び中学校一・二年生)による水彩風景画の作品展。

〈江戸へようこそ！ 浮世絵に描かれた子どもたち〉

⑥七月八日(火)～二二日(月) 七階第八展示室、(参加者二、二五三人)

特別展示「富士の絶景」

*「第九九回国際キワニス年次総会」開催記念として所蔵作品より展示。

⑦七月一五日(火) 一階さや堂ホール (参加者二一五人)

国際キワニス歓迎レセプション 国際キワニス幹部会員夜間特別開館

*伝統芸能で歓迎の後、展示を特別観覧。



チラシ

⑧七月一九日(土) 一階講堂(二一五人)

講演会「浮世絵師たちの子ども絵 腕くらべ―歌麿・広重・国芳を中心に―」

講師 中城正堯(江戸子ども文化研究会主宰・国際浮世絵学会理事)

⑨七月二二日(火) 七・八階展示室 (参加者三五人)

舛添東京都知事による「浮世絵に描かれた子どもたち」展視察

対応 河合正朝(当館館長)、田辺昌子(当館学芸課長)

⑩七月二七日(日) 一階さや堂ホール (参加者五一一人)

さや堂 de 音楽會「童心憧憬」

出演 関根彰良(ギター)

ゲスト 黒沢綾(ヴォーカル)

⑪七月二八日(月) 七・八階展示室 (参加者五二人)

駐日各国外交団による「浮世絵に描かれた子どもたち」展視察

対応 河合正朝(当館館長)、田辺昌子(当館学芸課長)

⑫八月九日(土) 一一階講堂 (参加者四〇人)

講演会 「祈りをまとうアジアの服飾に見る子どもの成長祈願」

講師 吉村紅花(文化学園服飾博物館学芸員)

⑬八月一七日(日) 一階さや堂ホール (参加者二四〇人)

特別企画「美術館で縁日!!」

参加・協力団体 花輪茶之介(飴細工師)、千葉市埋蔵文化財調査センター、千葉市科学館、当館ボランティア

〈竊木清方と江戸の風情〉

⑭九月一五日(月・祝) 一階さや堂ホール (参加者一〇三人)

さや堂 de 音楽會 「江戸の絲芸」

出演 竹澤悦子(箏・地歌三味線)

ゲスト 木場大輔(胡弓)

⑮九月二七日(土) 一一階講堂 (参加者一五一人)

講演会 「浮世絵末流 竊木清方」

講師 小林忠(岡田美術館館長)

⑯一〇月一二日(日) 一一階講堂 (参加者一五八人)

講演会 「竊木清方と江戸の風情」

講師 宮崎徹(鎌倉市竊木清方記念美術館副館長・主任学芸員)

〈赤瀬川原平の芸術原論〉

⑰一二月一日(土) 一一階講堂 (参加者一八八人)

トークショー① 「路上観察学会 VS ライカ同盟」

出演 藤森照信(建築史家・建築家)、秋山祐徳太子(芸術家)

進行 松田哲夫(編集者)

⑱一二月一五日(土) 一一階講堂 (参加者二〇三人)

トークショー② 「原平さんは弟子の七光り」

出演 南伸坊(イラストレーター)、久住昌之(マンガ家・ミュージシャン)
進行 松田哲夫(編集者)

⑲一二月六日(土) 一一階講堂 (参加者一八八人)

トークショー③ 「ハイレッド・センター、内科画廊とその周辺」

出演 田名網敬一(グラフィックデザイナー・イラストレーター)、谷川晃一(画家)
進行 山下裕二(美術評論家)

⑳一二月二一日(日) 一一階講堂 (参加者一七人)

ワークショップ 「多元宇宙の缶詰」

インストラクター 奥村雄樹(アーティスト)

ゲスト 永井均(日本大学教授)

〈ブラティスラヴァ世界絵本原画展〉

㉑二〇一五年一月四日(日) 一階美術館入口・八階展示室入口

新春の獅子舞

出演 登渡神社登戸神楽囃子連

②一月一七日(土) 一階プロジェクトルーム (参加者三三七人)
出品作家によるライブペインティング
出演 きくちちき(絵本作家)

③二月八日(日) 一階プロジェクトルーム (参加者五五人)
おはなし会
出演 えほんよみデリバリーチーム おはなし Pot

三 市民美術講座(一〇回)

①四月二〇日(日) 一階講堂 (参加者一二五人)
特別市民美術講座「かわいい琳派 中村芳中」 講師 福井麻純(細見美術館主任学芸員)

②五月三日(土・祝) 一階講堂 (参加者一三二人)
『光琳画譜』と中村芳中 講師 伊藤紫織(当館主任学芸員)

③六月二二日(土) 一階講堂 (参加者九九人)
「あたらしいまなざし―大下藤次郎からはじまる風景画―」 講師 藁科英也
(当館学芸課長代理)

④七月二六日(土) 一階講堂 (参加者七八人)
「江戸の子どもと浮世絵」 講師 田辺昌子(当館学芸課長)

⑤八月三日(土) 一階講堂 (参加者五四人)
「所蔵作品展 小さなものの宇宙」 講師 松尾知子(当館学芸係長)

⑥九月二〇日(土) 一階講堂 (参加者四七人)
「鏝木清方―絵師としての出発の頃」 講師 西山純子(当館主任学芸員)

⑦十一月二九日(土) 一階講堂 (参加者三九人)
「赤瀬川原平―千円札裁判時代の制作活動」 講師 水沼啓和(当館主任学芸員)

⑧十二月二三日(土) 一階講堂 (参加者七三人)
「赤瀬川原平交友録―一九六〇年代を中心に」 講師 水沼啓和(当館主任学芸員)

⑨二〇一五年二月七日(土) 一階講堂 (参加者一九人)
「無縁寺心澄の生涯―フォーヴィスムから児童書へ」 講師 藁科英也(当館学芸課長代理)

⑩二月二二日(土) 一階講堂 (参加者三三人)
「BIBを楽しむ こどもの目・おとなの目」 講師 山根佳奈(当館学芸員)

四 講師の派遣による講座等(一三件)

①四月二六日(土) 山口県立萩美術館・浦上記念館 (参加者四〇人)
「川瀬巴水―旅と仕事」(主催 山口県立萩美術館・浦上記念館)

講師 西山純子(当館主任学芸員)

②七月六日(日) 岡谷市文化会館(カノラホール) (参加者二〇〇人)

「武井武雄生誕一二〇年記念 シンポジウム『武井武雄とは何か?』」(主催 岡谷市、公益財団法人おかや文化振興事業団、イルフ童画館)

パネラー 西山純子(当館主任学芸員)

③八月一日(金) JAしもつけニューアプロニー (参加者四〇人)

下都賀地区市町教育委員会連合会全体研修会 『『深川の雪』と歌麿の生涯』(主催 下都賀地区市町教育委員会連合会)

講師 田辺昌子(当館学芸課長)

④八月二日(土) 川越市立美術館 (参加者七〇人)

「川瀬巴水―郷愁の日本風景」(主催 川越市立美術館、NHKサービスセンタ―)

ギャラリートーク 西山純子(当館主任学芸員)

⑤八月二〇日(水) 千葉市ことぶき大学校 (参加者六五人)

千葉市ことぶき大学校公開講座 「欧州の美術館に名画を訪ねて」(主催 社会福祉法人千葉市社会福祉事業団)

講師 河合正朝(当館館長)

⑥九月二〇日(土) 栃木県さくら市

田中一村作品調査・調査依頼 田中一村記念美術館
調査員 松尾知子(当館学芸係長)

⑦九月二七日(土) 岡山県立美術館 (参加者六〇人)

「中村芳中と『光琳画譜』」(主催 岡山県立美術館)

講師 伊藤紫織(当館主任学芸員)

⑧一〇月一三日(月・祝) 上田市立美術館 (参加者七〇人)

「山本鼎のすべて展シンポジウム 作家としての山本鼎」(主催 上田市、上田市教育委員会)

パネラー 西山純子(当館主任学芸員)

⑨十一月二五日(土) 千葉市立郷土博物館 (参加者一二人)

「浮世絵を通して考える江戸と房州」(主催 「江戸と千葉」研究会)
講師 田辺昌子(当館学芸課長)

⑩十二月二三日(土) 銚子市青少年文化会館 (参加者七二人)

「講座・犬吠埼灯台 浮世絵に見る文明開化―江戸から明治へ」(主催 犬吠埼ブランドン会)

講師 田辺昌子(当館学芸課長)

⑪十二月二一日(日) 千葉大学西千葉キャンパス (参加者一二人)

千葉大学公開市民講座 「描かれた江戸湾―海に向こうに見えるもの」(主催 千葉大学)

講師 松尾知子(当館学芸係長)

⑫二〇一五年二月七日(土) 千葉市稲毛図書館 (参加者一五人)

「美術講座」(主催 千葉市稲毛図書館)

講師 山根佳奈(当館学芸員)

⑬二月一四日(土) 茅野市民館アトリエ (参加者二五人)

「茅野市美術館を一緒にサポートしませんか もっと！茅野市美術館／夢の企画を考えよう」(主催 茅野市ミュージアム活性化推進委員会)

講師 山根佳奈(当館学芸員)

五 ワークショップ等

①七月二五日(金)、二六日(土) 七・八階展示室 (参加者のべ二一人)

「中学生のためのギャラリートーク¹⁴」

講師 鑑賞リーダー(美術館ボランティア)、山根佳奈(当館学芸員)

六 学芸員によるギャラリートーク(各一回)

「光琳を慕う 中村芳中」 (参加者五六人)

「水彩画家・大下藤次郎」 (参加者四七人)

「江戸へようこそ！ 浮世絵に描かれた子どもたち」 (参加者四四人)

「鐫木清方と江戸の風情」 (参加者五七人)

「赤瀬川原平の芸術原論」 (参加者五九人)

「プラティスラヴァ世界絵本原画展」 (参加者四五人)

七 学校との連携授業

(一) 学校団体の受け入れ

①「小中特別支援学校鑑賞教育推進事業」(合計二一校、一、一七一)

* 遠隔校等の来館を促進するため、美術館が送迎バスを用意し鑑賞プログラムを提供。

「光琳を慕う 中村芳中」 (二校一七七人)

「水彩画家・大下藤次郎」 (五校二三五人)

「江戸へようこそ！ 浮世絵に描かれた子どもたち」 (二校八一人)

「鐫木清方と江戸の風情」 (三校一八三人)

「赤瀬川原平の芸術原論」 (四校二五六人)

「プラティスラヴァ世界絵本原画展」 (六校二三九人)

②右記以外の方法で来館する児童・生徒の団体受け入れ(小中特別支援学校一五校七三八人／高等学校六校一四四人)

「水彩画家・大下藤次郎」 (三校一四四人)

「江戸へようこそ！ 浮世絵に描かれた子どもたち」 (三校六九人)

「鐫木清方と江戸の風情」 (三校一七三人)

「赤瀬川原平の芸術原論」 (七校三七五人)

「プラティスラヴァ世界絵本原画展」 (五校二二一人)

(二) 職場体験学習の受け入れ(二〇校三九人)

(三) 「千葉市図工・美術科担当等教職員鑑賞一日研修」八月二〇日(水)実施(参加者三三人)

講師 田辺昌子(当館学芸課長 講演「教材としての浮世絵」)
指導 当館ボランティア(ワークショップ「多色摺木版画体験」)

(四) 千葉市教育研究会中学校造形部会美術館活用グループとの連携
中学校美術部合同鑑賞会の実施 七月二十九日(火) (参加者六校のべ八九人)

(五) 高等学校の利用促進

高校生美術館体験プログラム 七月二十三日(水) (二校一〇人)
講師 田辺昌子(当館学芸課長)、山根佳奈(当館学芸員)

(六) 「千葉大学普通教育教養展開課目『展示をつくるA』『博物館実習B』企画
展示」 八月五日(火)～一〇日(日) (参加者二〇人)

「19の交差点」九階市民ギャラリー (入場者数三八三人)

八 アウトリーチプログラム

*千葉大学や教育機関、地域NPOとの連携事業である「千葉アートネットワーク・プロジェクト(WiCAN)」の活動。

①小学校×美術館×大学による「赤瀬川原平の芸術原論」鑑賞教育プログラム
の実施(協力校二校)
(千葉市立大宮中学校)

十一月三日(木) 事前授業 千葉市立大宮中学校
十一月七日(月) 「赤瀬川原平の芸術原論」鑑賞
十一月十八日(火) 事後授業 千葉市立大宮中学校

(千葉市立源小学校)

十一月二〇日(木) 事前授業 千葉市立源小学校
十一月二十五日(火) 「赤瀬川原平の芸術原論」鑑賞
十一月二十七日(木) 事後授業 千葉市立源小学校

②二〇一五年二月二二日(日) 千葉大学サテライトキャンパス美浜(旧千葉市
立高浜第二小学校) (参加者三〇人)
WiCAN2014総括イベント「場とコミュニケーション—アートで変わる、アートも変わる—」

九 ボランティア活動

(一) ギャラリートーク (合計 定例三四回、自主二五回/参加者九五六人
(定例五五二人、自主四〇四人))

*会期中毎週水曜日の定例ギャラリートークのほか、各ボランティアが自主的に行った不
定期のギャラリートークについて記載。

「光琳を慕う 中村芳中」 (定例三回、自主二回/参加者一〇六人)
「水彩画家・大下藤次郎」 (定例五回、自主八回/参加者二五二人)
「江戸へようこそ！ 浮世絵に描かれた子どもたち」(定例七回、自主五回/参加
者一七七人)

「楠木清方と江戸の風情」 (定例五回、自主四回/参加者二〇三人)
「赤瀬川原平の芸術原論」 (定例七回、自主二回/参加者一二〇人)
「プラティスラヴァ世界絵本原画展」 (定例七回、自主四回/参加者九八人)

(二) 鑑賞リーダー (のべ四三回二九五五人)

* 「小中特別支援学校鑑賞教育推進事業」等児童・生徒の団体受け入れ(七)への協力活動。学校側の希望に応じて、少人数グループでの鑑賞に対応する。鑑賞リーダーとして対応したボランティアのべ人数を記録。

「光琳を慕う 中村芳中」 (三回二四人)

「水彩画家・大下藤次郎」 (八回五九人)

「江戸へようこそ！ 浮世絵に描かれた子どもたち」 (四回二六人)

「鐫木清方と江戸の風情」 (八回五四人)

「赤瀬川原平の芸術原論」 (九回六三人)

「プラティスラヴァ世界絵本原画展」 (八回四七人)

(三) ワークショップの企画・実施

①八月二〇日(水) 一階講堂 (参加者三三人)

「千葉市図工・美術科担当等教職員鑑賞一日研修」(七) (三)を参照
多色摺木版画体験

②十一月九日(日)、一六日(日) 九階講座室 (参加者一五人)

木版画年賀状講座

③十二月七日(日) 千葉市生涯学習センター (参加者二三人)

多色摺木版画体験(まなびフェスタ2014)

④二〇一五年一月一八日(日)、三二日(土)、二月二二日(日) (参加者のべ八

九人)

「えほん屋台」イベント 読み聞かせ

⑤一月二四日(土) 一階プロジェクトルーム (参加者三三四人)

多色摺木版画体験

一〇 出版活動

(一) 展覧会図録(六冊)および主な掲載論文等

①『光琳を慕う 中村芳中』編集 千葉市美術館(伊藤紫織)／発行 芸艸堂
木村重圭「中村芳中について」

伊藤紫織「光琳追慕の諸相 中村芳中と酒井抱一」

福井麻純「芳中画の魅力 「光琳風」が示すもの」

中村麻里子「中村芳中と交流した備讃ゆかりの大坂画人 大原東野・瀧上旭江らの活動に注目して」



②『島根県立石見美術館所蔵 水彩画家・大下藤次郎』 編集 千葉市美術館
発行 千葉市美術館、美術館連絡協議会

原田光 「『菱花湾日記』を見る」

川西由里 「描くよろこび、伝えるよろこび」

佐々木静一 「大下藤次郎と水彩画の時代 『みづる』 発刊のころ」

大下藤次郎 『海と山 西総地方の紀行』、『安房の冬』

「森鷗外による大下藤次郎年譜」



③『江戸へようこそ！ 浮世絵に描かれた子どもたち』 編集 千葉市美術館(田

辺昌子)／発行 千葉市美術館、マンガステイン

中城正堯 「絵画史料から江戸子ども文化をさぐる」

村田孝子 「コラム 江戸時代の子どもの髪型について」

田辺昌子 「錦絵出版の発達と子ども浮世絵」



④『鏑木清方と江戸の風情』 編集 千葉市美術館／発行 千葉市美術館
宮崎徹 「鏑木清方の江戸趣味と明治趣味」

西山純子 「展覧会『鏑木清方と江戸の風情』について」



⑤『赤瀬川原平の芸術原論 一九六〇年代から現在まで』 編集 千葉市美術館
(水沼啓和)、大分市美術館(岩尾徳信)、広島市現代美術館(松岡剛)／発行 千
葉市美術館、大分市美術館、広島市現代美術館、読売新聞社、美術館連絡協議
会



山下裕二「『赤瀬川原平』とは何者か」

ウィリアム・マロツテイ「オブジェを持った無産者…一九六〇年代における赤

瀬川の政治性(ポリティックス)」

菅章「赤瀬川原平の根源(ルーツ)…六〇代の前衛とその終焉」

水沼啓和「赤瀬川原平 一九六八―七四」

松岡剛「赤瀬川原平によるトマソン、路上観察、そして芸術原論」

(赤瀬川原平について―関係者の証言)

篠原有司男「ホワイトハウスのゴンボー汁」

中西夏之「三人は真摯である」

谷川晃一「レディメイドの配色」

足立正生「原平さんに挑発され続けた!」

杉本昌純「原平さんと千円札裁判」

林静一「原平さんとの思い出」

松田哲夫「赤瀬川原平文章史序説」

南伸坊「『笑い』の芸術」

田中耕平「赤瀬川原平のこと」

末井昭「『ウィークエンドスーパ』は純文学の修業の場だった。」

久住昌之「赤瀬川さんとの思い出」

荒俣宏「赤瀬川原平さんちで風水を見た頃」

秋山祐徳太子「原平さんちのお年玉」

藤森照信「皮をかぶった」

坪内祐三「赤瀬川原平の偶然力」

中村政人「別のセンサー」

山口晃「沿うと云う事」

⑥『ブラティスラヴァ世界絵本原画展―絵本をめぐる世界の旅―』編集 平

塚市美術館(安部沙耶香)、足利市立美術館(篠原誠司)、うらわ美術館(山田志

麻子)、千葉市美術館(山根佳奈)、高浜市やきもの里かわら美術館(安藤さお

り)、広松由希子/発行 読売新聞社、美術館連絡協議会

ズザナ・ヤロソヴァ「第24回BIBと日本巡回展の意義」

広松由希子「第24回BIBと日本巡回展の意義」

ヴィエラ・アノシキヴァ「グローバルゼーションにおけるアイデンティティ

と、アイデンティティにおけるグローバルゼーション」

(二) 展覧会の出品目録

* 企画展・所蔵作品展ごとに発行。

(三) 定期刊行物

①美術館ニュース『C'n』第七〇〜七三号(四回)

②千葉市美術館研究紀要『採蓮』第一七号 ※掲載論文は左記の通り

藁科英也「無縁寺心澄 年譜と資料」

伊藤紫織「江戸の南蘋派末流 岡本秋暉」

③千葉アートネットワークプロジェクト二〇一四ドキュメント(発行…千葉アートネットワーク・プロジェクト)

一 一 ホームページの公開

(一) ホームページ

訪問者総数 五三四、七九〇セッション(二〇一五年二月まで)

閲覧ページ総数 一、六六〇、八一七ページ(同)

(二) 携帯電話用ホームページ

閲覧数 四八、七三三件(二〇一五年二月まで)

一 二 作品の収集

(一) 購入(一件)

無款『曾我物語』

(二) 寄贈(九件)

土肥刀泉《朝顔文皿》、《紅釉流一輪生》、《鉄砂釉平耳花瓶》、《釉彩花瓶》(以上、楠原辰次郎氏寄贈)

石井林響《印章ほか資料一式》(石井淳氏寄贈)

浅川伯教《ワイールドノート》(鈴木有二氏寄贈)

橋本関雪《万年報喜図》、池田遙邨《深耶馬溪》(以上、小川法之氏寄贈)

文承根《無題》(平石達人氏寄贈)

(三) 寄託(三〇件)

東山魁夷《自然と形象 雪の谷間》他

一 三 所蔵作品の修復・保存等

(一) 修復(二点)

(二) マット装(一〇三点)

(三) 写真撮影(四一点)

一四 所蔵作品の貸出、特別利用

(一) 作品の貸出(二四件一三六点)

*平成二六年度開催展について記載

①「追憶の美人 日本画家・鏗木清方」(佐野美術館、二〇一四年四月―五月)
鏗木清方《薫風》一点

②「ねこ・猫・ネコ展」(渋谷区立松濤美術館、二〇一四年四月―五月)
小林清親《猫と提灯》他 三点(寄託作品二点を含む)

③「上方の浮世絵―大坂・京都の粋と技―」(大阪歴史博物館、二〇一四年四月―六月 山口県立萩美術館・浦上記念館、九月―一〇月)

西川祐信《四季風俗図巻》他 九点(寄託作品一点を含む)

④「田中信太郎・岡崎乾二郎・中原浩大 かたちの発語展」(BankART Studio NYK、二〇一四年四月―六月)
岡崎乾二郎《木灰木を育つる Ash of tree grow a tree.》一点

⑤「描かれたチャイナドレス―藤島武二から梅原龍三郎まで」(ブリヂストン美術館、二〇一四年四月―七月)

恩地孝四郎《白亜(蘇州所見)》一点

⑥「光琳を慕う 中村芳中」(細見美術館、二〇一四年五月―六月 岡山県立美術館、九月―十一月)

中村芳中《白梅図》他 一六点(寄託作品一点を含む)

⑦「日本画っておもしろい!」(ニホンガ研究会) (長野県信濃美術館、二〇一四年七月―八月)

狩野山雪《雪中騎驢図》他 二点

⑧「美少女の美術史」(青森県立美術館、二〇一四年七月―九月 静岡県立美術

館、九月―十一月 島根県立石見美術館、十二月―二〇一五年二月)

鈴木春信《琴を弾く美人》他 一七点

⑨「磯崎新 12 x 5 || 60」(ワタリウム美術館、二〇一四年八月―二〇一五年一月)
三木富雄《EAR》一点

⑩「種村季弘の眼 迷宮の美術家たち」(板橋区立美術館、二〇一四年九月―一〇月)

鈴木慶則《高橋由一風鮭》一点

⑪「1974―戦後日本美術の転換点」(群馬県立近代美術館、二〇一四年九月―十一月)

高松次郎《赤ん坊の影 No.387》他 二点

⑫「名画を切り、名器を継ぐ―美術にみる愛蔵のかたち―」(根津美術館、二〇一四年九月―十一月)

岩佐又兵衛《弄玉仙図》(寄託作品)一点

⑬「無人島にて―「八〇年代」の彫刻/立体/インスタレーション」(京都造形芸術大学ギャルリ・オーブ、二〇一四年九月―一〇月)

八木正 《作品名不詳》(一九八二年(寄託作品)一点)

⑭「輝ける金と銀―琳派から加山又造まで―」(山種美術館、二〇一四年九月―十一月)

魚屋北溪《武者松竹梅番続 梅 武蔵坊弁慶》他 六点

⑮「山本鼎のすべて展」(上田市立美術館、二〇一四年一〇月―十一月)
山本鼎《ブルトヌ》他 四点

⑯「生誕一〇〇年 昭和の版画師 関野準一郎展」(青森県立美術館、二〇一四年一〇月―十一月)

織田一磨《東京風景 木場雪景》他 一〇点

⑰『月映』(宇都宮美術館、二〇一四年十一月―十二月 和歌山県立近代美術館、二〇一五年一月―三月 愛知県美術館、四月―五月 東京ステーションギャラリー、九月―十一月)

藤森静雄《地をたがやす心》他 七点

⑱「目出度面白江戸絵画(めでたおもしろえどかいが)〜こいつあは新春から縁起がいい〜」(菱川師宣記念館、二〇一五年一月―二月)

岩佐派《染物師図》他 二二点(すべて寄託作品)

⑲「わが愛憎の画家たち―針生一郎と戦後美術」(宮城県美術館、二〇一五年一月―三月)

勅使河原宏『世紀群』第1号 他 一一点(寄託作品二点を含む)

⑳「金山康喜のバリ―一九五〇年代の日本人画家たち」(神奈川県立近代美術館

葉山、二〇一五年一月―三月 富山県立近代美術館、五月―七月 世田谷美術館、七月―九月)

菅井汲《歓喜(YOROKOBI)》一点

㉑『燕子花と紅白梅』光琳アート―光琳と現代美術―(MOA美術館、二〇一五年二月―三月)

尾形光琳《四季草花図巻》(寄託作品)一点

㉒「没後一〇〇年 小林清親展 文明開化の光と影をみつめて」(静岡市美術館、二〇一五年二月―三月 練馬区立美術館、四月―五月)

小林清親《獅子図》他 一五点(寄託作品一点を含む)

㉓「春季企画展 山と海の廻廊をゆく〜信濃と北陸をつなぐ道〜」(長野県立歴史館、二〇一五年二月―五月)

《木曾義仲合戦図屏風》一点

㉔「生誕三百年 同い年の天才絵師 若冲と蕪村」(サントリ―美術館、二〇一五年三月―五月 MIHOMUSEUM、七月―八月)

伊藤若冲《雷神図》他 三点(寄託作品二点を含む)

(二) 写真の貸出、撮影等(特別利用)(七八件二三六点)

北辻良央《作品(一九七一年)》他

一五 友の会

(一) 会員数 二、四三二人(二〇一五年三月三十一日現在)

(二) 友の会バスツアー

「箱根 ポーラ美術館・岡田美術館を訪ねて」
二〇一四年十二月四日(木) (参加者三九人)

一六 博物館実習(実習生 一三校 一四人)

二〇一四年九月四日(木)〜一日(木)(のべ六日間)

一七 図書室の運営

公開日数 三四七日

利用人数 一、二二二人

一八 施設の利用(利用日数)

市民ギャラリー 三二一日(四五団体四九、五二六人)

講堂 三四一コマ

講座室 四七八コマ

さや堂ホール 三一八コマ

※講堂、講座室、さや堂ホールは、一日三コマ(二〇～一三時、一三～一七時、一七～二一時)

一九 他施設利用者

ミュージアムショップ売上件数 二〇、一五一件

レストラン来客数 一五、九一九人

平成二六年度 市民ギャラリー・いなげ 企画展および施設の利用者

(二) 企画展

①七月八日(火)～二二日(月・祝)

「花香利治スケッチ展―千葉の神社仏閣から」

*稲毛区在住の洋画家である花香氏が記録として千葉市内全ての神社仏閣を描いた「はがき絵」の一部を展示。

(二三日間/入場者一、四三七人)

②八月五日(火)～一〇日(日)

「世界児童画展千葉展」

*「世界児童画展」の優秀作品と千葉県の入選以上の作品約四〇〇点を展示。

(六日間/入場者九八四人)

③八月二二日(火)～二七日(日)

「創造海岸いなげ展」

*千葉市にゆかりのある若手作家、高橋朋子(陶芸)、佐藤華連(写真)、織間菜々子(絵画)の合同展。

(六日間/入場者六一七人)

④八月二二日(火)～二七日(日)

「千葉市中学校美術部展」

*市内中学校一七校の美術部合同展。約二〇〇点を展示。
(六日間/入場者六三二人)

⑤一二月二四日(水)～二〇二五年一月二一日(日)

「白井綾と受講生の写真展 異心地」

*千葉大学との連携事業 普遍教育教養展開科目「展示をつくるB」の受講者と指導した写真家の展覧会。

(二日間/入場者五七四人)

⑥二〇二五年一月四日(日)～一五日(木)

「ギャラリー・いなげ新春展」

*市民ギャラリー・いなげで講習会等の指導を行う地域の作家を中心とした小品展および漆芸作家・藤澤保子氏の作品展。

(二〇日間/入場者八一五人)

⑦一月二日(水)～二月一日(日)

「西岡美千代 floating world」

* 四街道市で酪農に従事しながら制作を続ける、新進の鍔金作家による個展。
(二日間/入場者七五〇人)

(二) 講演会・イベントの開催

①五月三日(土・祝)

「春のスケッチ大会」(参加者四一人)

講師 神尾吉夫(行動美術協会会員)、濱田清(二陽会委員)

②六月一四日(土)

「山口マオ版画ワークショップ」(参加者三二人)

講師 山口マオ(イラストレーター)

③七月一九日(土)

「茶道に親しむ会『親子お茶会』」(参加者一九組四一人)

講師 堤美智子(表千家教授)

助手 高橋節子、菅幸子、高山みね子

④七月二九日(火)

「教職員を対象とした画材研修会」(参加者四二人)

講師 大塚義孝(べんてる株式会社開発課長)

⑤七月三〇日(水)～三一日(木)(二日間)

「教職員実技講座」(参加者三二人)

講師 林哲生(市民ギャラリー・いなげ所長)

⑥八月二日(土)～三日(日)(二日間)

「夏休み子ども美術講座」(参加者二六人)

講師 為我井直子(稲毛二小教諭)、水野祥江(磯辺小教諭)

⑦九月二七日(土)、一二月二二日(土)(二日間)

「初心者のための写真講座」(九月参加者一五人、一二月参加者一八人)

講師 (九月)白井綾(フリーカメラマン)、(一二月)佐藤信太郎(フリーカメラマン)

⑧一〇月一日(土)～二日(日)(二日間)

「秋休み子ども美術講座」(参加者三〇人)

講師 林哲生(市民ギャラリー・いなげ所長)

⑨一二月八日(土)

「秋のスケッチ大会」(参加者三一人)

講師 神尾吉夫(行動美術協会会員)、濱田清(二陽会委員)、佐藤央育(京都市立芸術大学非常勤講師)

(三) 施設の利用者

展示室(三〇八日／二一、四九二人)

制作室(三〇八日／一五、七三八人)

(四) 旧神谷伝兵衛稲毛別荘の公開(三〇八日／二一、四九二人)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	
展覧会観覧者	光琳を慕う 中村芳中	7,299	5,975										13,274	
	水彩画家・大下藤次郎		2,985	9,514									12,499	
	千葉市美術協会特別展			1,210									1,210	
	江戸へようこそ!				4,227	6,707							10,934	
	鐘木清方と江戸の風情						5,906	7,619					13,525	
	赤瀬川原平の芸術原論							958	7,629	9,540			18,127	
	プラティスラヴァ世界絵本原画展										4,373	4,667	375	9,415
	第46回千葉市民美術展覧会												15,860	15,860
	春爛漫—千葉市美術館所蔵版画100選	7,163	5,579											12,742
	近代日本の水彩画/無縁寺心澄・石井光楓		2,743	8,654										11,397
	スモールワールド				4,109	6,749								10,858
	七つ星—近年の収蔵作家たち							4,883	5,288					10,171
机のうえの旅—楽しい現代美術—										3,295	3,565	310	7,170	
展覧会観覧者 計	14,462	17,282	19,378	8,336	13,456	10,789	13,865	7,629	9,540	7,668	8,232	16,545	147,182	
貸出施設利用者	市民ギャラリー	2,268	3,195	3,436	2,807	1,147	2,951	2,895	3,865	3,847	2,646	20,469	0	49,526
	講座室	399	634	454	414	349	378	447	496	417	424	110	380	4,902
	講堂	179	482	477	217	538	343	260	347	220	45	92	0	3,200
	さや堂ホール	181	475	181	262	311	284	177	1,661	330	145	227	80	4,314
貸出施設利用者 計	3,027	4,786	3,338	3,700	2,345	3,956	3,779	6,369	4,814	3,260	20,898	460	60,732	
その他利用者	図書室	84	130	131	155	84	73	89	83	93	90	81	128	1,221
	講座・講演会等	304	446	203	2,702	334	255	217	430	261	282	107	0	5,541
	コンサート・ワークショップ等	0	0	0	117	33	103	0	15	17	300	23	0	608
	学校プログラム・実習等	177	78	320	207	37	199	157	363	262	244	124	0	2,168
その他利用者 計	565	654	654	3,181	488	630	463	891	633	916	335	128	9,538	
	ミュージアムショップ売上件数	2,098	2,792	2,490	763	1,163	1,504	1,888	2,370	2,675	1,034	1,050	324	20,151
	レストラン来客数	1,430	2,451	1,727	1,036	1,146	1,237	1,375	1,238	1,036	956	928	1,359	15,919
他施設利用者 計	3,528	5,243	4,217	1,799	2,309	2,741	3,263	3,608	3,711	1,990	1,978	1,683	36,070	
美術館 利用者総計	21,582	27,965	27,587	17,016	18,598	18,116	21,370	18,497	18,698	13,834	31,443	18,816	253,522	
市民ギャラリー・いなげ	花香利治スケッチ展—千葉の神社仏閣から				1,437								1,437	
	世界児童画展千葉展					984							984	
	創造海岸いなげ展					617							617	
	千葉市中学校美術部展					631							631	
	白井彩と受講生の写真展 異心地									144	430		574	
	ギャラリー・いなげ新春展										815		815	
	西岡美千代 floating world										664	86	750	
	講演会・イベント参加者		41	32	105	26	15	30	50					299
	展示室利用者	1,942	1,942	1,484	1,729	1,524	1,734	1,687	1,500	1,272	440	1,503	2,700	19,457
	制作室利用者	794	928	848	507	326	1,227	1,349	1,549	1,170	1,503	661	724	11,586
旧神谷伝兵衛稲毛別荘	635	946	642	711	1,332	683	1,176	2,289	497	983	718	880	11,492	
市民ギャラリー・いなげ 利用者総数	3,371	3,857	3,006	4,489	5,440	3,659	4,242	5,388	3,083	4,835	2,968	4,304	48,642	

(空欄は該当なし・利用不能を示す。)

千葉市美術館研究紀要
採蓮 第十八号

二〇一六年三月一日発行

編集・発行―財団法人千葉市教育振興財団
千葉市美術館

〒〇一八五三 千葉市中央区中央三―一〇―八
電話 〇四三―二二―二三三一(代)

翻訳協力―バーバラ・クロス

制作―印象社

Bulletin of Chiba City Museum of Art
Siren No.18

March 1, 2016

Edited and Published by

Chiba City Museum of Art

3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 JAPAN

Phone. 043-221-2311

Translated by

Barbara Cross

Produced by

Insho-sha

ISSN 1343-148X